



始



東海亭金龍講演  
新川 虎舟 画

忠二代之勇士

▲特別上製▼



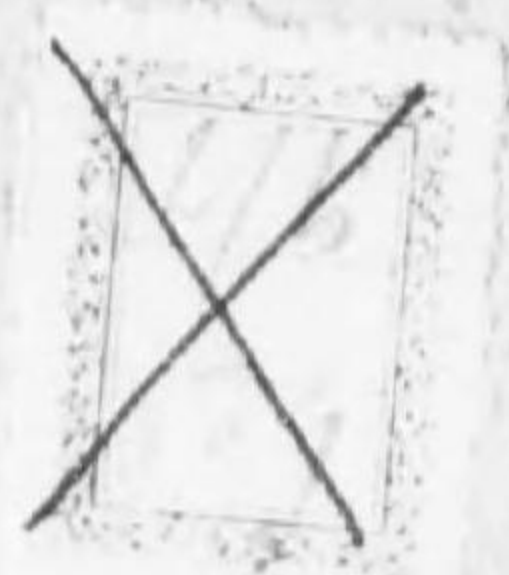
大正 國口屋文政發行



東海亭金龍講演  
歌川珖舟画

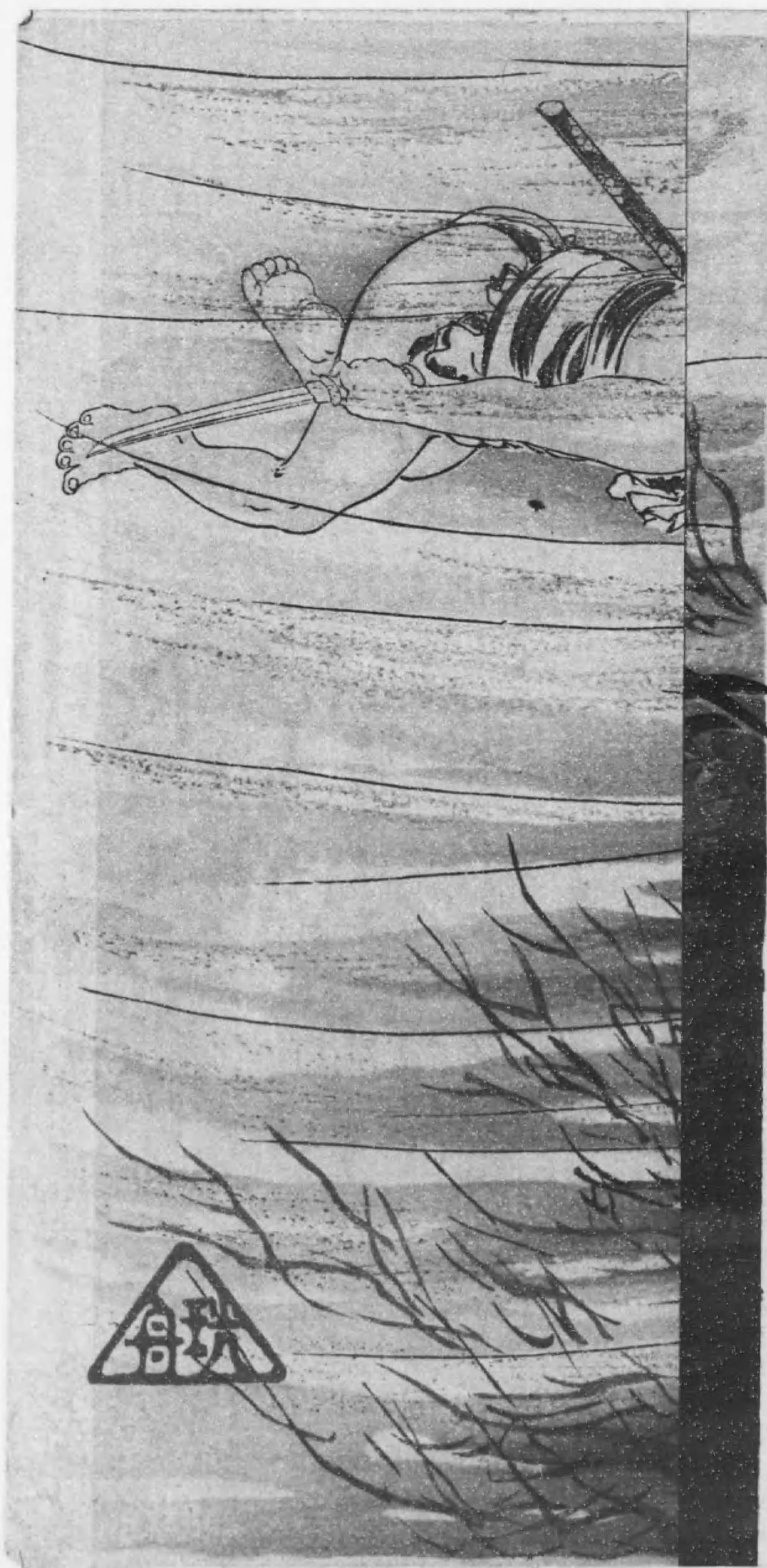
孝忠に一代だいの勇士ゆうし

▲特別上製▼



大阪 樋口隆文館發行











持 116  
343



忠孝 二代の勇士

第一席 (烏鷲の戦ひ)

東海亭金龍口演  
月廼舍美華筆記

六五  
3. 6. 13  
内交

會得し、天晴れ名家の遺臣と唄はれ加藤再興に力を盡し、後年  
 十五才にして弓術の奥伎に達し、二十才にして武藝十八番を  
 子友千代、成り長し、二代の覺兵衛、七才にして怪童と呼ばれ、  
 旗下に於いて左るものありと知られたる飯田覺兵衛の遺孤の一  
 儀は「忠孝二代の勇士」と題しまして豊家の忠臣加藤清正公の  
 のお好みに應じておこがましうも口演いたします講談標題の  
 エ、今回何ぞ目新らしい豪華のお話をとお馴染の樋口隆文館主









かし強情な覺兵衛ですから石を置いて打つと云ふ事はしない、殊  
 に初めから黒も取らない、遠慮なしに白を引き寄せて済まして  
 居るから清正公は「是はよくよく、此りや覺兵衛黒ではないか、馬  
 如何にも御前白を頂きました、普通の勝負と違ひ、今日は其方子に  
 向つては二目も違ふ、それに普通の勝負と違ひ、今日は其方子に  
 ではないか、馬鹿なことを申すな、白を渡せ、覺渡せと仰在やつても  
 御前がたしかに強いので……、またそのやうな強情を云ひ居  
 る、然らば今日は特別をもつて互先と致し遣はす、覺ぢや互先  
 それ、面白からふと存じます、覺兵衛もなか、人が悪い、初  
 めから互先と云つたら二目番けとなる、此奴計畫にかゝつたなと清  
 ら機先を制して白を取つて了つた、此奴計畫にかゝつたなと清  
 正公、流石に戦場で千軍萬馬の駆引に、駆れ切つて居る大將で  
 すから、人の胸中を見貫ることがなかく、早い、今に剛い目に會

の折柄とて出仕の覺兵衛に向はれまして、清幸い、徒然に苦し  
 ひ折柄、一石やらふ、相手に成ぬか、覺御相手致しませう、し  
 かし、御前、今日はたゞの勝負だけとは興味が薄うございませう、し  
 ば、何んぞ賭けて御相手申し上げませう、清なに、賭勝負と申  
 すか、夫れ面白からふ何んなりと望んで見やれ、覺さればござ  
 い、ます、御前お負けに成りますればお手許の御愛品を一つ何に  
 か頂き、存じます、承知ぢや、望みに任せ遣しませう、其の  
 一ッ渡せと申すか、承知ぢや、望みに任せ遣しませう、其の  
 方負けと極らば何んとする、覺御前のた望みに従がひませう、  
 予が申すこと、善悪の如何んと問はず、即座に否應なしに承諾す  
 る事、これは何うぢや、覺承知いたしました、さらば始めを  
 と、清正公、お相手仕つる覺兵衛の主従、碁盤をなかに黑白戦を  
 開きましだ、尤も碁は清正公が確に一目上手でございませう、し



してやるぞと、碁の勝負には主従もなんにも無い、一目くして打ち込んでお出になる、一目打つても油断がない、此處を切るぞ、此引ッ包んで皆殺しと、一目標は此處は我領分と、だんく、と攻むれば處は繼ぎす、よしさらば崩す互ひの虚實、早や勝負は醋と相防ぐ、防ぎたが、盤面を見るときは熱湯の如き汗を流成り、なつて来た、盤面を見る、白の旗色がだんく、と悪くなつて来た、迂鳴つて一目兵衛、顔には熱湯の如き汗を流して、ウソく来た、迂鳴つて一目兵衛、顔には熱湯の如き汗を流それでも大勢を挽回する手段がつかない、流石の覺兵衛も弱つて了ひました

第一席(二) (理屈攻め)

今黑白の戦ひ真最中と云ふ所に、例の無遠慮者の親玉で押し通

して居る木村又藏と井上大九郎の兩人が出仕した、清正公には勝色が通へて居る、御言葉が、取次者番の若侍が、只今御前には之れへ通せ、御言葉が、取次者番の若侍が、只今御前にはは、殿を、相手に、碁の真最中と話を聞いて、其處は氣の合ふた、田殿を、相手に、碁の真最中と話を聞いて、其處は氣の合ふた、日ここ、強情者の飯田を、困らせ、通つて御挨拶も申さな、村と井上、其のま、御前へ押し通つて御挨拶も申さな、に拜見と盤面近く座を進めて見ると、面白、覺兵衛が頭から湯氣を出して迂鳴つて居る、苦しな、覺兵衛が頭から湯た、木村又藏、又覺兵衛、苦しな、覺兵衛が頭から湯山、以、上の籠城戦、石は死んだ、一方の血路を開いて、明の大軍を、以、上の籠城戦、石は死んだ、一方の血路を開いて、明の大軍で、死んで、貴様の石は死んだ、一方の血路を開いて、明の大軍だ、ね、し、かし、其、り、や、貴、様、駄、目、だ、ぞ、此、り、や、愈、々、面、白、い、と、井、上、







無妻で押し通した覺兵衛が、今五十五才の今日、妻を迎へる必要更になし、殊に世は太平無事に治まつて居るとは申し、徳川豊臣兩家の確執、何時も破れせんにも限らないといふ時節、猶更ら妻の要あらんや、まかり違へば老後の思ひ出で、此の骸は戰場に晒さんと覺悟の身、どうしてお受け致すことが出来ませう。左様ぢや、覺兵衛へ妻帯のお勤めでございまするか。清如何に云はさぬ、善惡ともに予が申す言葉に背かぬと賭事致したでないか。覺、それと此れとは違ふと申すか。覺、如何にも。然らば二枚舌を用ふと申すのか。覺、全たく以て左様な儀では。清、否、でなければ予が命に從ふか。覺、さればと申し、此れが。清、異存あつても採用致さぬ、木村、井上活た証據ぢや。覺兵衛も、理に攻められては仕様がな、木村、井上活た証據ぢや。覺兵衛も、

ぬ仕儀と相成りましたが、夫れでも何うして直にた受け致しませうとは申しません。

第一席 (三) (黄道吉日)

清正公には強情な覺兵衛だから、無理押し付けに押し付けてもな、か、降伏する奴ぢや無い事を御存知ですから、先づ側に居合す木村、井上、の兩人から、其れどなしに取持ちやうにせねば、納まるまいと、其處は智者と云はる、清正公、通木村、井上の兩、其方達の意見は、どうぢや、賭碁の事は、別として、兵衛、今、以て無妻であるが、新しくては一代にして破滅となる、家の断絶は、祖先へ對し、此れ位、不孝な事は、ない、自分一個の、國時代の供養は、兎も角も、祖先の祭を絶すに至つては、言語全断、懸



いふ譯には参りません、左右の思案の上、先づ木村はどうかやら  
 一方の逃路を考へ出した、又恐れながら御前、御媒酌下さる程  
 の女性彼れ是れと非難もございませぬ、たゞ主君の仰せにて  
 ては一代の大禮、殊に縁不縁は神の業、たゞへ主君の仰せにて  
 迅へましても、情合に於て欠けたる点もございませぬ、到底共  
 白髪といふ譯にはまゐりかねます、覺兵衛御返答に苦しみます  
 るは、つまり其等の点もあるか、様、存じます、然る後、否  
 女性御儀も乍憚らばりたまるもの、にございませぬ、然る後、否  
 應の御返辭申し上げどう存じます、其の通り、  
 が其の通り申し、木村は覺兵衛が殊の外困つて入るを見るにつ  
 け、氣の毒でなりました、木村は覺兵衛が殊の外困つて入るを見るにつ  
 ならば、嫌や、此れなりました、御免と無理から批難を付けて謝絶申さ  
 うと云ふ目算、覺兵衛も其れと推察したから、最う大丈夫小野の  
 小町であれ、揚貴妃であれ、一言の下にお断り申さふといふ考

子孫なきは武門の耻ぢや、覺兵衛初老なれども、元氣更に衰へ  
 ざれば、尙ほ妻帯の要はある筈、其處で予は彼に妻とせし  
 て迎へるが嫌ならは、嫌でも宜し、此れならは、兼て見込んだ女  
 ための妻なり、今覺兵衛に媒酌せん、此れならは、兼て見込んだ女  
 もあるぢや、今覺兵衛に媒酌せん、此れならは、兼て見込んだ女  
 には、兩人共驚いた、か、養子の第一は、氣に懸けて居ない事、  
 なかつたが、却て、妻帯となる第一は、氣に懸けて居ない事、  
 出て無主義で居るを知つて居るので、直ぐにお答へする事が  
 出来な、互ひに顔を見合せて、恐れ入つて仕舞つた、清正公重  
 ねて、返辭のない、思ひ、兩人共に、荒氣の大將だから、人返  
 予が媒酌を無理と思ひ居るのか、當の本より先づ兩人の返  
 辭が聞きたい、何うぢや、兩人「何しろ荒氣の大將だから、人返  
 出た事、後へは、退ぬ、他の事とは違ひ、木村井上、萬事は無遠慮で  
 押し通す程の兩人も、他の事とは違ひ、木村井上、萬事は無遠慮で



ふの人はかねて三人共に宜存知て居りますので、木村、井上の  
 兩人が先づ乗り氣になりて仕舞ふた、又ア飯田、お受け致さ  
 めか、里江殿は願ふても無き良縁、お受申しせ、又彌兵衛とは  
 ぬ別の間柄、否、願ふても無き良縁、お受申しせ、又彌兵衛とは  
 格別の間柄、否、願ふても無き良縁、お受申しせ、又彌兵衛とは  
 覺兵衛更らに乘氣になりて、御前の思召しなり、且つ女丈夫ともい  
 つて居る様子にございませぬ、御前の思召しなり、且つ女丈夫ともい  
 ぞう仕まつりなして、御前の思召しなり、且つ女丈夫ともい  
 べき里江どの、なにしに違ひございませぬ、御前の思召しなり、且つ女丈夫ともい  
 當年五十五才にございませぬ、御前の思召しなり、且つ女丈夫ともい  
 せば親子の相違、よしや、里江どのには十八才、それ短かき夢  
 の間に、儀ばかりは、殿のため、御宥し下しおかれませう、御ウム、尤  
 ば、此儀ばかりは、殿のため、御宥し下しおかれませう、御ウム、尤  
 な、此儀ばかりは、殿のため、御宥し下しおかれませう、御ウム、尤  
 士の儀、夫婦でも、縁なれば、其れまでの事は、たとへ契りは短く、と

へ、清正公には御笑釋あつて、大う首肯に首肯れ、また、外程  
 左様、ちや、予は、まだ、女性の、身の上、は、語なかつた、喃、そして、  
 も、ない、子、が、手許に、於て、尤も、深く、愛撫して、居る、杉村彌兵衛  
 の、娘、は、彼、は、ま、東、西、の、辨、へ、も、無、かつた、もの、ちや、其、の、後、母、を、失、ひ  
 の、時、は、身、の、乳、母、の、世、話、に、て、在、る、も、の、聞、き、召、し、出、して、育、て  
 孤獨、の、身、の、女、の、年、は、十、八、の、器、量、は、其、方、達、も、知、つ、て、の、通、り、  
 上、げ、し、衰、れ、の、女、の、同、窓、竹、馬、の、友、達、も、知、つ、て、の、通、り、  
 し、て、覺、兵、衛、と、彌、兵、衛、と、同、窓、竹、馬、の、友、達、も、知、つ、て、の、通、り、  
 山、の、其、中、に、も、千、軍、萬、馬、の、駈、引、に、も、手、を、引、き、合、ふ、た、親、友、の  
 間、で、あ、つ、た、其、の、友、の、遺、兒、を、妻、に、も、立、つ、て、否、と、申、す、か、  
 ぞ、う、や、覺、兵、衛、の、木、村、の、井、上、の、妻、に、も、立、つ、て、否、と、申、す、か、  
 ア、大、變、や、こ、う、な、る、と、相、手、の、女、が、な、り、と、否、の、應、の、と、申、す、か、  
 な、い、殊、に、主、君、の、手、で、大、け、野、暮、で、す、な、で、す、か、ら、の、心、得、も、あ、る、と、云  
 が、な、い、殊、に、主、君、の、手、で、大、け、野、暮、で、す、な、で、す、か、ら、の、心、得、も、あ、る、と、云







上程の夫婦仲、御媒酌になりました清正公にも殊の外御漫足  
 に相違ございませぬ、然るに世の中の事と申しますのは、諺に  
 も云ふ通り、満れば欠ける、花も一時、善尺魔決して宜いことば  
 かり玉の御賀なり且つは幼主内大臣秀頼公も、春れまして、早新年  
 の御機嫌お伺ひの爲め御上阪、清正公の成り思召にて、當年は留守  
 の御方、御機嫌お伺ひの爲め御上阪、清正公の成り思召にて、當年は留守  
 居の役を仰せ付られ、熊本へ残り、清正公の成り思召にて、當年は留守  
 案内の通り、當分の御上阪、清正公の成り思召にて、當年は留守  
 徳川の康公と秀頼公の御對顔と云ふ一例の京都市二條の事に於  
 かり、清正公の成り思召にて、當年は留守  
 か、清正公の成り思召にて、當年は留守  
 千變萬化、尤も長けたお方です、家康公、殊に反間苦肉の策  
 略に、尤も長けたお方です、家康公、殊に反間苦肉の策

清正公の鑑定に依つて添ひ添る、夫婦の仲、鬼の覺兵衛も一代  
 の果報者に相違ございませぬ、さて斯うなると、覺兵衛夫婦の  
 あつた若殿原は堪らない、寄ると觸ると岡燒半分で、覺兵衛夫婦  
 の噂で持切ると云ふ有様でございませぬ、  
 この珍縁談が纏まるとは思はなかつた、貴公等の仲には落膽  
 して居るものもあるだらうな、  
 〇「左様だ、大分と思召の御連中が肝腎サ、は、聞いて居たが  
 そうなつちや仕様がな、お互ひに御祝儀にも行かねばならぬ、  
 〇「笑ひことぢやない、お互ひに御祝儀にも行かねばならぬ、  
 誠に早や貴公等の御心中をお察し申すとお氣の毒でならぬ、そ  
 れに飯田殿御夫婦の仲睦まじさ、疊の上の鶯鴛といふ有様を、  
 見せつけられたのは、浦山吹の花だらふ、お互ひに御愁傷さま」  
 でも、心持がするのであらふな、お互ひに御愁傷さま」  
 〇「左様だ、大分と思召の御連中が肝腎サ、は、聞いて居たが  
 そうなつちや仕様がな、お互ひに御祝儀にも行かねばならぬ、  
 〇「笑ひことぢやない、お互ひに御祝儀にも行かねばならぬ、  
 誠に早や貴公等の御心中をお察し申すとお氣の毒でならぬ、そ  
 れに飯田殿御夫婦の仲睦まじさ、疊の上の鶯鴛といふ有様を、  
 見せつけられたのは、浦山吹の花だらふ、お互ひに御愁傷さま」



















まする次第にございますと、天晴れ健氣な妻の覺悟に、覺  
兵衛殆んど感じ入り、しばしは無言。

第 二 席 (三) (名残の酒宴)

駿馬痴漢を乗せて馳すと云ふ、古人の言葉がございまするが、  
世の中、似たもの夫婦と云ふ諺言もあり、多いでございま  
す、また、駿馬痴漢の乗せて馳すと云ふ間違ひが多いやうにござ  
い、尤も加藤肥後守清正、古今の英傑の鑑識をもつて、階老同  
を誓ふ夫婦件なら、清正、古の如きは例外も申さねばなりませ  
借を見れば、自害して忠孝貞節の道を全ふせうと云ふ大覺悟、  
尤も加藤肥後守清正、古今の英傑の鑑識をもつて、階老同  
を誓ふ夫婦件なら、清正、古の如きは例外も申さねばなりませ  
借を見れば、自害して忠孝貞節の道を全ふせうと云ふ大覺悟、

普通女の子や出ない事でございせう、尤も大和魂はどい  
こは、男子ばかりの専賣物ではございませぬ、里江の如きは  
確に大和魂といふ丈夫の心をもち居るのでございませぬ、近  
は乃木大将夫人の如き、皆大和魂といふ精神が健固であつた女  
丈夫でございませぬ、閑話休題、覺兵衛には妻の健氣な覺悟を見  
ては、如何な丈夫も堪つたものぢやございませぬ、目に泣かね  
ど心には、流石は杉村彌兵衛と云ふ勇士の血統、殊に先君の御愛育  
受けし程ある、我妻として誇るべき其の魂、今は何にか包ま  
ん、所存の程を明さんに、先づ波々酌で貰はふ」波々酌で呉  
たる士杯をグツと呑み干し、先づ波々酌で貰はふ」里江は又良  
る、覺兵衛妻のため、良人、はまた呑んで妻へ、里江は又良人へ返  
干して、良人へ返す、良人、はまた呑んで妻へ、里江は又良人へ返  
す、先づこれにて納め申すぞ、さらば聞け、此の度徳川殿の



之進なる者の切腹と云ひ、且つ其の遺書にて事明白、其の遺書  
 の越さし依れば、昨夜深更に及び、君の親書を徳川殿お使者へ  
 手渡し申し上げ、また墨付を受領し、君の御手許へ差上げし  
 所、君にはイト御満足の御辭退申しあげたに御座り、御採り  
 舞ひて、幾度か使者の御役目御辭退申しあげたに御座り、御採り  
 却つて七生まで勸當の御立腹、まつたこの事家中の者へ明す  
 に於ても同罪たるべしとの言葉に、今はこの事、君命を果  
 したる身も、思へば加藤のお家へ謝すとある、獅子身中の虫、今更ら  
 悔に堪はず、及して御家中一同へ謝すとある、獅子身中の虫、今更ら  
 どは云へ、晝夜勤務に油断なかりしも、心に油断あつて斯くの  
 始末は、皆これ覺兵衛が身の過失に於ては先君へた謔申す外に  
 の罪を謝し、また冥途黄泉の地へ下りては、先君へた謔申す外に  
 手玉ふべし、命一ツを三方四方へ懸兵衛が身の成り果すの不行跡へ

御事可なり、當肥後領土を汲りし、奥州白羽にて三萬石の差  
 領土に、築城は先君の御處、然る籠に、今れ徳川殿私財を  
 になり、如うに、世領土の君の御處、然る籠に、今れ徳川殿私財を  
 のみならず、五十萬石の大守に、加藤家も、來同然己の支配な  
 普代臣を養へ、無難題にも、服を申し出れば、先も方  
 君の御遺訓を頭頂戴、徳川殿へ、不服を申し出れば、先も方  
 はねば、失座に、使を遣ひ、早速に、明渡し、存せし、折柄、忠命に  
 がたし、御座り、玉ひ、早速に、明渡し、存せし、折柄、忠命に  
 臣の言を却け、贈り、玉ひ、早速に、明渡し、存せし、折柄、忠命に  
 受領し、御事書、をけ、贈り、玉ひ、早速に、明渡し、存せし、折柄、忠命に  
 は、受領し、御事書、をけ、贈り、玉ひ、早速に、明渡し、存せし、折柄、忠命に  
 誰し知り、事と、何人も、なかり、しが、今、城、中、に、於、て、御、裁、決、り、御、心、願、へ















國へ殘り居る者は申出よ、以前の食祿をもつて召抱へんと、  
 達へ御隨身致しますので、相成りませぬか、武士は暴動でも起らねば  
 候へ、御隨身致しますので、相成りませぬか、武士は暴動でも起らねば  
 宜い、戦々々々たる有様でございませぬか、武士は暴動でも起らねば  
 す、戦々々々たる有様でございませぬか、武士は暴動でも起らねば  
 は、戦々々々たる有様でございませぬか、武士は暴動でも起らねば  
 の、戦々々々たる有様でございませぬか、武士は暴動でも起らねば  
 き、戦々々々たる有様でございませぬか、武士は暴動でも起らねば  
 米を、戦々々々たる有様でございませぬか、武士は暴動でも起らねば  
 せ、戦々々々たる有様でございませぬか、武士は暴動でも起らねば  
 あ、戦々々々たる有様でございませぬか、武士は暴動でも起らねば  
 に、戦々々々たる有様でございませぬか、武士は暴動でも起らねば  
 れ、戦々々々たる有様でございませぬか、武士は暴動でも起らねば  
 す、戦々々々たる有様でございませぬか、武士は暴動でも起らねば

居りましたが、月満て山和尚も大きに喜び、母子健全でござい  
 の、居りましたが、月満て山和尚も大きに喜び、母子健全でござい  
 り、居りましたが、月満て山和尚も大きに喜び、母子健全でござい  
 ひ、居りましたが、月満て山和尚も大きに喜び、母子健全でござい  
 友、居りましたが、月満て山和尚も大きに喜び、母子健全でござい  
 編、居りましたが、月満て山和尚も大きに喜び、母子健全でござい  
 し、居りましたが、月満て山和尚も大きに喜び、母子健全でござい  
 た、居りましたが、月満て山和尚も大きに喜び、母子健全でござい  
 りも、昨日まで今日まで、加藤家の領分であつた肥後一圓は、山  
 川も、昨日まで今日まで、加藤家の領分であつた肥後一圓は、山  
 御治制が萬事に緩やか、殊に舊領主加藤家の御支配と相成  
 第三席 (一) (二里の山道)







を言つた事はなかつたのでございませう、處が今日は常にない運  
 いこと、いつもの何んなに遅くなつても暮六ッ過ぎ酉の下刻  
 (當今の午後七時)までには歸宅するのには今日ももう戌刻すぎで  
 ある、それに歸宅らぬので、母里江の心配は一通りでない、天  
 にも地にも懸け代への申譯がない、身長こそ大いだが、また六ッ  
 立れし長人へ對し、申譯がない、身長こそ大いだが、また六ッ  
 や七ッの子を、この山道を通はせる自分が悪かつた、千仞の谷  
 に、試す獅子の訓はさる事ながら、これは又あんまり無法であつ  
 た、小兒には無理であつた、もう、明日から止めさせねばな  
 らぬ、勉強も大事だが、体が無く、居れば宜い、左様でな  
 分、別であつた、和尚の鹿へ泊つて居れば宜い、左様でな  
 かつた、曉はなんせう、兎も角も鹿までお訪申すが、近道と、其  
 處は清正公に愛育された程の里江なら、武術の嗜みもまた覺へ  
 もあれば、こんな山道位はなんとも思はぬ、たゞ護身用には嗜へ

あり物凄くもあり、眞に幽然たる別天地のやうで、馴れたる機  
 夫でさへ、一人はいやだ、云ふ位の阪道を、友千代に平氣の平  
 左、恐しいとか怖いとかいふ事は、毎日は一生懸命に勉強して夕  
 下刻(當今の午前七時)宅を出る、毎日は一生懸命に勉強して夕  
 方は申す刻から山を下る、これを毎日、雨の日も風の日も、夕  
 什、麼、ことは頓着なく相變らず勉強して居ります、素讀を教ると  
 講、議、を、知、る、と、云、ふ、有、様、に、は、一、を、聞、い、て、十、を、覺、る、と、い  
 講、議、を、知、る、と、云、ふ、有、様、に、は、一、を、聞、い、て、十、を、覺、る、と、い  
 ら、舌、を、巻、い、て、驚、か、す、と、居、た、處、が、此、方、は、幼、年、友、千、代、の、柄、は、大、き、い  
 が、なんど云つてもまだ七才の秋で、此方から、幼年友千代、柄は大きい  
 には、自然、途、草、を、食、つ、て、遊、んで、居、る、から、爺、婆、ち、や、頼、り、に、な、る、こ、と、が  
 ある、その都度は心配でたまらない、爺婆ちや頼りにならない、  
 ので、自身に迎へに行くこともあるが、これまで一度だつて叱言



ひ懐、帯にはさんで今我が家の門を立ち出でんとする處へ、  
今日、和子が来ない、どうしましたと尋ねに來たが船山和尚、  
里江は「エッ」と吃驚仰天……。

第三席(二) (喧嘩の相手)

友千代の歸宅があまり遅いので、母里江はもうジツとして居ら  
れない、月にはあれども晝さへ暗き山阪道、馴れない足では危険  
なと左手に松明振り、頂度門の戸を出やうとす、何處へ行  
出逢ひ頭に「里江、これは里江どのではないか、今頃から何處へ行  
かつしやる、貴僧は叔父さまお師匠様、いまに友千代  
が歸りませぬので御座室に御厄介か、それとも道にて怪我はせ  
ぬかと、心配のあまり御座室までお訪ねにまゐりまする所で、  
船わッ、何んと云はつしやる、然らば何にか、今日もまたい

つもの通り、愚僧の慮へまゐられたかな、それはまた異なることぢ  
や、今日は和子が見へないので、愚僧も其れ心配ぢや、庵室で  
ジツとして居られず、日が暮たのでやつて來たのも若か病氣  
起りはせぬかとな、馬なんと仰せられます、あの友千代は今朝  
ほごお寺へは参りませぬとな、馬待てど暮せどな、里江……  
流石氣丈夫な里江でも、これには驚きましたな、いきなり船山  
和尚の衣の袖に縫り付き、里叔父さん、ど、ど、什麼いたしま  
せう、里江の驚き、その嘆きも尤もぢやが、まづ「氣を確に  
確に、これ里江どの、里叔父さん、妾どうしませう」そのま  
ドッ身を投げ伏して、泣き崩れたかと思へば何んといつても  
其處は女の弱いところ、もう癪を起して七転八倒、のッ氣に  
反るかと思ふと目を廻してしまつた、里江、これ里江どの、氣を確  
かに、これ、あゝ仕舞た持病の癪か、爺や、婆さまは居らぬか、  
水ちや、水を、無はい、これは和尚さままでございまするか、







せん、何卒か勘忍して下されや」  
 大猿を叩き殺すには普通大抵の力では叶はぬ事、  
 た怪我もせず、無事にこうして歸宅つたものごと、  
 を捲いて感心してました、しかしこんな事ばかりも  
 山道にはこんな猛獣が出ないにも限らないから、  
 つけて此方から避けねばなりませぬぞと説き諭し  
 が、聞き入るやうな友千代ではございませぬ、口  
 イといふて居ります可笑的が、猛獣であれ、和尙  
 ものかど心の中では可笑しが、毎日、和尙の許まで  
 山道を平気で覗ふて居りまして、一歩も一歩も  
 ちや出世が来ぬ、侍士の子は武藝を知らんでは  
 来ないで、遊びにこしらへて貰つた半弓を稽古にか  
 と其の秘術まで會得すると云ふ話一寸一息いれまし

辨當を木の枝へ吊り下げて菊の花を折つて戻つて見ると、  
 辨當がいない、は、確に此處に吊つておいたに、  
 らんと探して居ると、上空から寸断々々になつた風呂敷包み  
 蒐つたので、變だと空を見る畜生奴、この猿奴が引つ  
 木の空で食つて居る、たのれこのまゝでは濟さぬと、  
 此奴を追ひ廻し、どの、の詰り組打を始めたが、爪と  
 した友見て下され、衣服も此の通り食ひ裂れました、  
 もこの通り爪の形、猿も一生懸命なら此方も一生懸命、  
 爪と齒が怖いの振りを放し幸に枯木の枝が落ちてあつた  
 り、飛び蒐つて来る奴を叩き伏せ、起き上る奴を拂つて  
 ち倒し、這いかゝる處を叩き伏せ、やつと撲ぐり殺して  
 いたは、彼れ是れ暮前、それから宅へ歸らうとすれば道が  
 ないので、あちら此方と駆け廻り、やつと道が知れ  
 いで歸りました、友お師匠様や母さまに、御心配かけて濟ま







の矢で射止めて呉れんどの意気込みだから凄まじい、さらうな  
るど獨り天狗で、的ばかり射ては面白くない、猫でも犬で  
も雞でも見つけ次第目掛り放題、射て射られた、俺の所の猫が  
危なく、牛が馬が………正可牛や馬は射も致し、友千代の亂  
雞が、牛が馬が………その都度母はお説をするが、どうも友千代の亂  
暴にも驚いた、その村中で射ることは出来な、野や鳥では  
萬が一怪我が拍子にでも人様に射當ては大變だから、山に入  
つて狐や狸、鬼を射るが宜い、飼犬や猫を射るのぢやない、叱言  
を射る位なら空飛ぶ鳥を狙ふが宜い、さすれば何誰からも叱言  
も来ない、明日から山にお出なさい、怒られまして、成程と  
合点した友千代、其から山にお出なさい、怒られまして、成程と  
背負つて出掛け、而して其の往復の途中、道なき道に分入  
つては、兎などを追ひ出して狙つて見るが、どうして中

ことぢやない、引き絞るうちに向うから赤んべに、左様ならど  
もなんとも云はずに逃げて仕舞、口惜いな、畜生覺へて居やが  
れ、平地踏んで残念がるが及ばぬ腕なら仕様がな、又鳥  
なぞは平氣なもので、狙ひ定めて放つ矢が風を切つて空を飛の  
を、ガア、云つて笑つて居る、癪に觸らア畜生ッ、幾ら怒  
つて見た處で向ではバカーア………啼て糞でも仕かけさうな塩  
梅だから、流石の友千代もうんざりして了つた、友弓とはこん  
な六ヶしいものか知らん、其りや其の筈だ、中るが不思議とい  
ふのが弓ですもの、小供の腕に半期やそこら稽古したつて動か  
ぬ的なら中りもせうが、空飛ぶ鳥や、山阪駆け獸に中つて堪  
りませうや、併し熱心と云ふ程恐怖いものはありません、鳥や  
獸にこそ中らぬが、もうこの頃では半弓では弱くて引き堪へが  
しない、大弓を買って下さい、坊は、大弓でないとお稽古が出  
友母様、大弓を買って下さい、坊は、大弓でないとお稽古が出











い 友よし今度はこの槍の付いた奴でた見舞申すぞ、なんでも  
 大い 友よし今度はこの槍の付いた奴でた見舞申すぞ、なんでも  
 向ふの山では類りに犬の吠る聲がする、それと友千代の犬も吠  
 る 友よし今度はこの槍の付いた奴でた見舞申すぞ、なんでも  
 眺め 友よし今度はこの槍の付いた奴でた見舞申すぞ、なんでも  
 フイ 友よし今度はこの槍の付いた奴でた見舞申すぞ、なんでも  
 来さうだと思ふほどの見や向ふの芒原から真一文に駆け  
 来るとかと思ふほどの見や向ふの芒原から真一文に駆け  
 来るとかと思ふほどの見や向ふの芒原から真一文に駆け  
 岩であれど木であれ、衝突もこの小退り、友千代目  
 掛けて飛んで来る物さ、これ普通の小退り、友千代目  
 泣き出して逃げる面白さ、これ普通の小退り、友千代目  
 すから、こりや面白さ、これ普通の小退り、友千代目  
 の弓を一本取りや面白さ、これ普通の小退り、友千代目  
 き 友よし今度はこの槍の付いた奴でた見舞申すぞ、なんでも

が 付いて居る、其處で初しめて矢の根と云ふものがあることを  
 會得した見や、成程、矢ちや、猫だつて殺すこともなぬ、こんな  
 母様の頼み申して買つて頂かふ』と、其の矢をこつて元の  
 まで来ると云ふ奴が、出で向ふの山から、狐だの兎だの  
 の猿だの、友はてな、獵師が大勢で来やがた、それ此方へ逃  
 来ると云ふ、友はてな、獵師が大勢で来やがた、それ此方へ逃  
 逃げるんだな、よし、俺も一ツ射殺して遣ふ、こりや大分面白  
 なつて来た』其處が子供です、射殺して遣ふ、こりや大分面白  
 サア来た鹿だ、その狐だ、此方へ追ひ出して呉れるな、面白  
 處の獵師は知らんが、宜う此方へ追ひ出して呉れるな、面白  
 も申上げました通りで、一本の矢を射つて仕舞つたが、先刻  
 た 友よし今度はこの槍の付いた奴でた見舞申すぞ、なんでも



飛ばし牙にかけ、難ぎ倒す。其の猛勢には、何物も敵として、其の向ふ事は出来ません。大きな奴にかゝつては、如何な強氣なものでも、大底は殺れて了ふが逃げに出来ません。また向ふたらぬ岩と岩との細間で、逃げ登る際にも、背から殺れるにきまつて居る、と云ふて岩に、駆け登る際にも、背から殺れるにきまつて、噛み付いて見たが、アテ無、飛び来る猪の真正面から衝突かつ、間と距離を居ないから、友千代は、脇差を抜くなり、切先きを空に、向けて駆け来る猪の方へ、頭をやつて、脇差を抜くなり、切先きを空に、で柄をどつて、頭の上へ、突き出した、猪は、た先真暗で、すから、牙に

第 四 席 (二) (金剛力)

一筋の矢に百年の壽命を籠て射た。鑷矢に、頭を射れた猪は所謂、手負猪の死物狂ひ、暴出しては、岩であれ、石であれ、鼻頭で跳ね

て、猛りに、猛り、血を流して、荒れ出した、かと思ふと、友千代目掛け、ひで、死ぬ、奴、ちやない、起上つた、お先真暗、狂ひに狂ひ、が、サア大變、これ、死んで呉れたら、萬歳ですが、一本の矢位、止と中つた、猪は、急所をやられたので、一度は、パツタリ倒れた、懸命は、可なり強かつたので、矢は、猪の真向額に、やつと射中た、方生、命の瀬戸際、なんだ、と、矢頭を計つて、切つて放てば、一本が、あんな、奴だから、飛び付くに、相違ない、何にせいで、この一本が、相











の 間 柄 であつたと聞く、其の昔は天晴れ武勇の譽れありし御仁  
 ちやと喃、シテこの山へは弓矢の稽古に参りました武は、  
 深山に分入るは危険ぢや喃、父母在す遠く遊ばず、稽古ならば  
 人の居ない野か島にするがよい、此處は知るまいが木の倉の山  
 中ぢや、友にツ、あの木の倉の山中でこいまするか、それは大  
 變、歸りが遅くなり、友へ送り下るか有難う存じます、言葉付き  
 心配のしやるな、友へ送るか有難う存じます、言葉付き  
 なり動作なり何う見ても山家育ちとは思はれませんが、何れは由  
 緒ある人の胤であらふと、件の武士は奥に入り、武送つて遣は  
 さう、心配せずと先づ語らふに、して船山和尙に就て今、何を  
 讀んで居らるゝな、友は論語を讀んで居ります、武論語とな  
 然らば問はんが、仁とは友は論語を讀んで居ります、武論語とな  
 兄弟、武禮とは、友亂を作らず、武智とは、友人を識り自己を知

は飯田山麓の者で、名は友千代、年は七才、父は如何なる人であつたか存  
 御も、あるであらふな、友は、父は如何なる人であつたか存  
 じませぬ、またお腹に居た時分失なりましたとやら、今は母一  
 人でございませぬ、武母御一人とな、それは淋しい喃、してこ  
 の山へ何しに來たのか、飯田といへば二里半も距てあらふに、  
 友飯田の絶頂には常樂寺と云ふお寺がございませぬ、そのお寺  
 の和尙様が私の讀書手習ひの師匠様でございませぬ、毎  
 前當國領主加藤清正公の臣下に於て、豪傑飯田覺兵衛と世に  
 唄はれし名士の建立、それより飯田山の名ある由、然らばその  
 往持こそ船山和尙とは申さぬか、友は其の和尙が私師匠を持  
 様でございませぬ、武左様であつたか、夫れは、宜き師匠を持つ  
 て居るのう、俺はまだ達ないが、和尙は確か覺兵衛とは叔父







猪は他の獲物と一緒に友人夫婦共に擔がせ高保殿には友千代を召し連れてた立になる、友千代は血に塗れた脇差を猪の背で拭いて翰へ納める、それをチラと御覽になつた高保殿、高いか様、あの脇差は三條宗近、あの小刀を所持するからは何様由緒ある者、に相違はあるまい、學問と云ひ、骨柄と云ひ、天晴れ物の役にたつべき稀代の少年末頼母しき者を得たり」と心の喜び、何事も屋敷に歸つた上と友千代を麓近くまで送り届けに相成りました、友千代はこゝで再會を固く約して別申し、男み進んで立ち歸りました、これが當人出世の、端緒と相成りました。

第 四 席 四 (深淵の猿ヶ池)

さて其の翌日になると友千代、自分では天晴武士に成り済まし

た氣で居るから面白、しかも高保の弓矢の秘術を見ては小供心に、弓矢の徳の廣大な事が分つてまゐりましたと見へ、頻りに弓を引く、母里江はこれを大層苦に病まして、里其方は明けても暮ても弓ばかりを玩弄しておいでだが、弓矢は敵を作すもの、戦國の時代なら知らぬ事、太平の世に生れたものは、武藝イハ弓矢のた稽古よりも讀み書き手習ひの事、學問を精出し、偉ひ人にならばなりませぬぞ」と申し聞けますと友千代は、し、友よ、心を得て居ります、學問も大切なら、武士の子は、武士らしく、弓矢の稽古も大切、やと存じます、その武士の子は、武士をいたすのでございませぬ、里、さ、その、學問の稽古させます、其方は、武士の子でも、武士とは、云はぬもの、學問の稽古させます、も、武士の子と人に云はれたい、爲め、友、そりやまた何故でございませぬ、何事も、其方が十五才になりやつてから、友千代は不審でならぬ、武士になるも十五、ならぬも



















千代が大蛇に食ひ裂れてゐる血とはばかり思ふてゐるのと、難  
 なく蛙を刺し殺し、自己の五体の二倍からあるといふ奴の死骸  
 を引つ擔ぎ、泳ぎ上つた時には驚きましたな。〇「たや大きな岩  
 か石か擔いで居るせなんだらふ。▲「るらい小供ぢやねへか、そ  
 れにして今血はなんだらふ。〇「皆なで心配してゐるからなア……、  
 〇「早く泳いでお歸りよ。〇「皆なで心配してゐるからなア……、  
 友馬鹿云へ、心配したつてなんの役にたつかい、それよりも  
 此奴を引揚げる用意でもするがよい。△「そりや何んだぞ、岩か  
 石かい。友「岩や石のやうでも大きな蛙だぞ、此奴が水を惜むん  
 だ、殺してやつたら、もう大丈夫。▲「なんだ蛙だぞ、水中で殺した友  
 なの奴が驚いた、恐ろしいこつたぞ、蛙よりも水中で殺した友  
 千代の胴脚に驚いた。〇「サア、皆で引きあげろ、俺はこれか  
 ら栓を抜きに行くんた。見物せい。皆で引きあげろ、俺はこれか  
 藻緑込み、樋の栓に手をかけるが否や、曳やと揺つて二タ振り

ても油断のなれば大蛙、洞穴より水中にとびこんだその水音、  
 水煙、浪は煽つて吐く水柱に毒氣を含む、されど物の数々とも思  
 はぬ強氣の友千代、刺していきなり蛙の背にとびかゝつて二タ刺し三  
 刺の柄も通れど刺しても苦しき蛙の背とは思はれぬ。友「此奴、背  
 岩のやうだ、しかも苦しき蛙の背とは思はれぬ。友「此奴、背  
 よりも腹だ、それでも苦しき蛙の背とは思はれぬ。友「此奴、背  
 い、背と離れて水中深く潜るとすれば、蛙も左はさせじと水底  
 深く藻断がなれば、蛙は水中の方へ逃げ、安んずる物凄さ、よしさら  
 ば、身を捨てなれば、蛙も水中に居たまま進走つて  
 の脇に突さ立てたから又、刀腹を刺したの血は一面に進走つて  
 上る面まで真下から又、刀腹を刺したの血は一面に進走つて  
 池の面まで真下から又、刀腹を刺したの血は一面に進走つて  
 を眺めた村の人々、こんな騒動をやつて居やうとは知らず、これ



















はまたどうしても武士になりたいたいといつて動かない、たごへ御  
 勘氣業らふとも、これには和尚も困りましたな、まるで中に立  
 つた柱で動きがとれぬ、里江どのの、たん身の仰在ることにも  
 道理がある、また友千代どのにも相當の理屈はある、其處で愚  
 老の分別ぢやが、今加藤家と申せば四離八裂ぢや、肥後公の御  
 子孫在すにせよ、誰あつて御養育申して居るやら、それすら判明  
 の事になつて居る、今でさへその通りまして十年後二十年後と  
 先途を見届け申すは、今もあまの御在家を尋ね求めて、御  
 ら飯田家の嫡流、友千代どのの外にありませぬ、おん在家  
 友千代の望みに任せ、武士として、今十年後、おん在家  
 を尋ねさせ、それ叶はぬ時ちや、出家得道、武士となるには十  
 年二十年の學問武藝の鍛錬も要るのやが、坊主には何時でもな  
 れる、二十年の學問武藝の鍛錬も要るのやが、坊主には何時でもな

ませうと、茲に師匠と弟子の仲に相談が纏りました、さて船山  
 和尚に於きましては、友千代の頼みに否みもならず、態々麓へ  
 下つて里江どのを訪れ、友千代の希望を語り、武士になして下さ  
 るやうと、くれぐれも相變らず先君、且つは父覺兵衛の菩提のため、  
 てくれません、相變らず先君、且つは父覺兵衛の菩提のため、  
 出家させたい、これが自分の望みでは無いが、良人の遺言であ  
 る、それも加藤家残落の以前ならば兎も角も、今は仕へん君も  
 ないのに、武士になるのは心得違ひ、それより父の遺言を守  
 らせて、僧侶にしたいと、どうして聞かぬか、本人の望みに任せ  
 ての望みなら、父に代つて七生まで勘當、その儀とく御申  
 う、その代り、父に代つて七生まで勘當、その儀とく御申  
 聞かせ下されませうと、どうぞして聞かぬか、本人の望みに任せ  
 ございませぬ、そこ船山和尚には、この事を友千代へ傳へ、此方  
 つて、講めねばなるまいと、船山和尚には、この事を友千代へ傳へ、此方















さうでございませう、高保先生には、御自身に居間にて御書見になつて  
 居る所へ取次ぎの門弟、御訪問にございませう、御口上によれば、今より  
 兵衛と仰在る方、御訪問にございませう、御口上によれば、今より  
 九ヶ年以前、秋、飯田山中にて難儀の場合をお助蒙り、その上  
 師弟の約束をなしたる者、その當時は七才なりしが、十五才の  
 春尋ね來いとのお言葉に従ひ、今日参堂、飯田山中の小僧がま  
 ゐりに飯田の山中にて……」  
 暫時くは御思案の体でございませうか、  
 たが、ウム、さうか、あの小僧がまゐりしか、苦しうない、こ  
 れへ通せ、が、まてよ、神童……才……二十才過れば只の人、  
 服、これ、小真に美々しく、十五才といはれますが、どう見ても二  
 衣

うでございませう、殊に武藝十八番に秀で居るばかりでない、詩  
 歌、諸曲の風流、事より、茶道、活花に至るまで、御堪能といふので  
 實は、鬼に金棒、天下に恐怖いものなし、殊に忠義一圖の方で  
 ございませう、實に誠高保先生より幾代、細川公、御自慢の御家來で  
 せば、皆御承知の元祿武士の華、忠臣の鑑として、末三石代まで  
 で、芳名を青史に残し、たゞ播州赤穂の首領となつて、怨みも  
 野内匠頭、長矩候の御遺臣、四十有七、首領の城、五万三千石、  
 積る雪の、夜中、仇敵、吉良上野介、大石内蔵之助、良雄が、細川首  
 尾よく、主君の仇を、翫ひましたる彼、切腹の仰せ付られ、自及の  
 公へ、預ると相成り、翌年二月四日、切腹の仰せ付られ、自及の  
 内蔵之助の介錯を仰せ付られ、安場と申せば、細川公、丹後田邊の  
 城主たりし時より、御家來で、子々孫々、速綿として、今日に及ぶ  
 うでございませう、殊に武藝十八番に秀で居るばかりでない、詩  
 歌、諸曲の風流、事より、茶道、活花に至るまで、御堪能といふので  
 實は、鬼に金棒、天下に恐怖いものなし、殊に忠義一圖の方で  
 ございませう、實に誠高保先生より幾代、細川公、御自慢の御家來で  
 せば、皆御承知の元祿武士の華、忠臣の鑑として、末三石代まで  
 で、芳名を青史に残し、たゞ播州赤穂の首領となつて、怨みも  
 野内匠頭、長矩候の御遺臣、四十有七、首領の城、五万三千石、  
 積る雪の、夜中、仇敵、吉良上野介、大石内蔵之助、良雄が、細川首  
 尾よく、主君の仇を、翫ひましたる彼、切腹の仰せ付られ、自及の  
 公へ、預ると相成り、翌年二月四日、切腹の仰せ付られ、自及の  
 内蔵之助の介錯を仰せ付られ、安場と申せば、細川公、丹後田邊の  
 城主たりし時より、御家來で、子々孫々、速綿として、今日に及ぶ



十才、筋骨逞ましき美男子にして、辨舌さはやかにして貴公子と申しても耻かしからぬ凛々しい方と見え申しました。高門弟はこれへ通さつせ、高保改めて對面いたす。○「御免ッ」取次のさうあらふ、彼奴なかくの才物ぢや、粗略にいたすな、すぐさうこれへ通さつせ、高保改めて對面いたす。○「御免ッ」取次の門弟は一禮して引き退る、高保先生には座を改めてお待ち受けになつてゐると、案内につれて廊下傳ひ、杉戸口から木先きまで参りました友千代、ピツマリと板敷に座を構へ、兩刀とつて背後へ廻し、無腰になつから前手にさして居た扇子を右手にぬいて前へ、静かに身を繕ひして兩手を支へ頭は下ても、眼は先生へそまぎ、まづ一禮いたしましたる落着たる遣方を瞬きもせず、その一舉一動に御注目になつた高保先生、思はずも座を進めになりました。飯田山中の珍らしや、友千代どのか、はや九ヶ年の昔となつた、飯田山中の珍らしや、友千代どのか、はやれしぞ、しかも約束の言葉を忘れず、尋ねて來られた志、一郎

過分に思ふ、そこは端近か、話が出来ぬ、これへ座を進められよ。友ハッ、冥加にあまる優しのお言葉、友千代身にとり光榮に存じまする、就きましたは友千代當年十五才、九ヶ年前のた言葉に甘へ、今日母の許を受け武藝修業のため罷り出でてございます、願はくば、幾久しく御教導下したかれまするやう、低頭平身、禮を厚くし頼み入る、高保殆んど感じ入り、得難き弟子と心に喜び、高九ヶ年前の約束、今となつては反古にもなるまい、は、は、は、及ばすながら教導いたさう、但し今より十年間の苦勞、それ承知か」と尋ねられ、友千代は十年間、粉骨砕身の勉強する誓を立てる、尋ねられ、友千代は十年改め、師弟の盃、いよく友千代武術鍛錬苦心の一家へ止るべしと息いれまして。



高保先生は當代の傑物、文武兩道の達人、人を見ざるの見識がある、つくく、と友千代の風采骨柄の言動作に御注目になり、こましたが一擧動式作法に叶ひ一点の批難すべき所がない、これこそ前途に多大の望を屬する稀代の少年である、今一千に餘る門弟もあるなかに、器量骨柄、友千代に及ぶ程の者はなからふ、末頼母しき少年である、思ふ存分仕込で見やう、どれほど名譽ばかりでないか、我道場の譽れ、かつは當藩の誇りともなる、同じ育てる位なら、こんな門弟である、千人の門弟に代へても苦しうない、大變にお惚込み相成り、千人が、それとは招きにもた出しになりませ、先づ近ふ、こゝへと膝元近くに招き

第七席 (一) (草履摺むか)

寄せになりまして、高九ヶ年前の約束は約束、如何にも十五才どならば尋ね来よ、武士に取り立てやらふと申したに相違ない、しかし、武士になりた望の汝は、町人でもあらす、大小たばさひそのい、山家に育つても、機夫、獵夫でもあらす、その上、武士になり風采、誰の目からも、武士らしく見ゆるが、その上、武士になりたい、とは、知行取り別として行末は、奉公の世話してくれか、イヤ、武藝の稽古は別として行末は、奉公の世話してくれか、たか、武士が、武士になりたいとは、行末は、奉公の世話してくれか、ぬ、どうや、高保先生も意地が悪い、態と少年と合点が、あな答を、するか、弄ひながらお話しになり、父が遺物のこの兩刀に、外の顔色、友如何も、武門の生れには相違ございませ、些と仔細あつて、素性の儀は申し兼ねます、父が遺物のこの兩刀に、公、した、察し、願ひたいのでござい、す、父が遺物のこの兩刀に、











に始終友千代に御注意になつたが、もう一ツ呼吸が分らぬ様子  
 でゐる奴に相違ない、今度は弓で試して遣ふと第二日目でござ  
 ります、高飯塚、今日は久しぶり振りに弓の稽古をやつて見やう、  
 尤も先生の弓術は飯田山中で自分の危き場所を助けてもらつた  
 のでよく知つてゐる、しかし相手は猪の油断の際を狙つて射た  
 もので、今自分のところに、先生のお腕前、  
 弓はそんなものか、拜見しやうと、心の中にうら喜び、的の用意  
 を致し、金の的、高弟和泉と太郎が側にゐて、的が違ふ、先生  
 のは五分の金の的、高弟和泉と太郎が側にゐて、的が違ふ、先生  
 ……真に煙管の鉢、高弟和泉と太郎が側にゐて、的が違ふ、先生  
 京の大矢、数で有名、三十三間堂と同じで、から、五分の金的は、

ては流すも空飛ぶ鳥でも射落すまで、その妙伎に達する友  
 千代で、稽古を拜見して、道場の掃除、庭前まで、ちやんと打水して、後  
 刻まで道具の整理、道場の掃除、庭前まで、ちやんと打水して、後  
 はまた道具の整理、道場の掃除、庭前まで、ちやんと打水して、後  
 一本も残さぬ、それから夜に入ると、子の刻まで、ちやんと打水して、後  
 和漢の書に眼を曝し、それから夜に入ると、子の刻まで、ちやんと打水して、後  
 は、必ず供をする、お供先きでも、供待の間は、先生が他用つて  
 物を取り出して、請ひ、お供先きでも、供待の間は、先生が他用つて  
 一ツは、流石の先生も、その根氣のよいに、驚いて了つた、それと  
 弟、衆では、分らぬが、つて稽古を見て居ると、驚いて了つた、それと  
 か、槍か、それ、弓か、何れにしても、多腕に、一日は、剣道の型  
 に相違ない、槍か、それ、弓か、何れにしても、多腕に、一日は、剣道の型  
 二日目に、槍か、それ、弓か、何れにしても、多腕に、一日は、剣道の型











ぬは射は的跳ささた間走絞顔人  
 矢的割一にててあ人、つつのの  
 繼のつ本、先残や々々呆てた違心  
 早据たのこきるづ、ッ異、ふの  
 やへらか、矢れの三た呵と様素ほ千差  
 にはらかり一たへはいどッ放と輝ど心萬ば  
 はれたかッ最、如ふ感矢はきふ違、  
 高真的の初第何間嘆は過、一ふ中  
 保中を的の矢のどあ聲のたす、のそ  
 先生中央とを見跳はるす、中、の友千事  
 始めたりるね同間に第第第一のき顔頓中  
 高弟そッ驚ズく第三の矢の的は残の中央の金の的にオブリ………見  
 共腕、の左最初の外射的に中つたが、  
 あつと手右にの矢、然も三番目の  
 呆き、練に散し、矢等を見事に  
 れ目して矢のみに  
 急にまら

さ相し如方せ、胸ま根手初たを  
 も見かしくはんその部づが心め友始  
 不へも静片、のを三十大膽違、代高弟  
 平しま六ま唾高構開、十間不ふ今、ま、方  
 らしたの返呑の美肩五な勝、では名が  
 くが矢へんでに事、胖た少手、は譽、  
 白隨用、控は始は張は金のすふの弓、  
 眼分意友千代すはれは一度、眼、引手製  
 で心憎した代は充ばに十五少吸下、  
 るきたのは三分に呼座吸して御注、  
 の方は三呼の吸をんと計つて、  
 もあ、個の的を二本宛射込む決心と、  
 れば、はにに本宛射込む決心と、  
 、感自にに本宛射込む決心と、  
 心分がの宛射込む決心と、  
 して出射込む決心と、  
 む射込む決心と、  
 ない射込む決心と、  
 のから射込む決心と、



六筋の矢に非凡の腕前を現はしました友千代はその日から引き

第七席 (一) (名花の一輪)

は年友に復と然もそ 覺
すの千かした名ら可いん兵
の後代けてた乗ばいな衛
一席はのて友ます師の飯田結構と
、如才武藝のそでこざいませう
一すなる、腕はめきとつて教へる
一息いれましと上達する、かくして
、いよ、友千代名を現

名をど充飯ふとれど耳草合口言
乗の明う分田、は出の觸にせが葉
れさやの友喃馴來にはりま、塞も
この、意強、飯田、あるし、御機顔、殊、座の、下、手、に、兩、友、千、代、は、非、凡、の、業、に、呆、氣、に、ご、ら、れ、今、更、ら、あ、い、た
、飯、塚、あ、り、や、が、て、そ、の、腕、前、ま、ど、は、師、弟、の、間、柄、を、尊、様、は、用、ひ、な、い、で
、ご、う、も、可、笑、し、い、こ、り、や、本、姓、の、勇、士、の、血、統、の、い、ま、だ、本、姓、を、











さ廊下から 三三郎兄さま、兄さま 三誰ぢや、露子か 三ま  
 ア大きな声 三三郎は地聲ぢや、なんぞ用でもあるか 三あな  
 たお一人 三左様ぢや、兄さん一人で、それが何うした 三あな  
 にをして入らつしやいます 三万公か、乃公は父上から昨日お  
 借もうした古今集を讀んで居る、中々面白いよ 三あの前集  
 を、露も拜借して讀んだ事もございまして 三左様か、元來和  
 歌なんかは優美は優美だが面倒臭くて不可 三だつて昔の豪  
 軍大將とか豪傑は、皆な和歌がお上手ぢやありませんか、殿様  
 の御先祖幽齋公様、太田道灌、八幡太郎 三お前はなかく  
 者ぢや喃、可いかな、太田道灌、八幡太郎 三お前はなかく  
 はどうしても武術が面白い乃公は武で立つ、れ前は風流な良人  
 につくが宜らう 三左様か、そりや有難い拜見したい喃 三あな  
 達人、それに優美な風流のお嗜みのあるお方が……おほ、よ、  
 三ぢや兄さんなんかは嫌はれものだ、嫌いなら彼方へ行け

三兄さま、あなた怒つて 三怒りはせぬが邪魔になる 三覺  
 へて居らつしやい、人が切角あの梅へ短冊つけて上げやうと思  
 ふて居るのに 三左様か、そりや有難い拜見したい喃 三あな  
 た見て下さるの 三三見るとも」

第 八 席 (二) (不言不語)

戀なればこそ、安場の息女露子さん、一首の和歌を短冊に認め  
 まして、あの梅が枝に括りつけて置いたなら、戀しい君の手に  
 ふれもせんと、思案の末が、黙つて括つておいては疑がはれる  
 原因になるので、一應兄に見せてからとは、なか／＼油断が  
 来ません 三兄さま、お笑ひなさると御覽に供ませんから其の  
 たつもりで 三馬鹿申せ、まだ見もしないものが笑つたり賞た  
 り、ごちらとも出来るものか、まア温順に見せたら宜からふ、



所<sup>ところ</sup>が、翌<sup>あした</sup>日<sup>ひ</sup>になつて昨日<sup>きのう</sup>自分<sup>おのれ</sup>の括<sup>くわく</sup>りつめた短<sup>たん</sup>冊<sup>さつ</sup>でないのが結<sup>むす</sup>ひ  
 つけてある、ハテなア、誰<sup>たれ</sup>の短<sup>たん</sup>冊<sup>さつ</sup>かど近<sup>ちか</sup>よつて見るとアラ悲<sup>かな</sup>し  
 露<sup>つゆ</sup>子の短<sup>たん</sup>冊<sup>さつ</sup>は寸<sup>すん</sup>断<sup>だん</sup>にひき割<sup>わ</sup>いて捨てある、その代<sup>しろ</sup>りに一<sup>いつ</sup>ツ  
 新<sup>あらた</sup>らしののが一<sup>いつ</sup>ツ、讀<sup>よ</sup>んで見るといはすとした、戀<sup>こひ</sup>の叶<sup>は</sup>はぬ  
 印<sup>しるし</sup>とでも申しませうかその歌<sup>うた</sup>に  
 散<sup>ち</sup>りてこそ、花<sup>はな</sup>の風<sup>かぜ</sup>情<sup>なさけ</sup>は、あるものを  
 さてはわが戀<sup>こひ</sup>の叶<sup>は</sup>はぬ証<sup>あかし</sup>、思<sup>おも</sup>ふた方<sup>かた</sup>の歌<sup>うた</sup>に相<sup>あ</sup>違<sup>ちが</sup>ひあるまじと、  
 それからといふものは、証<sup>あかし</sup>、思<sup>おも</sup>ふた方<sup>かた</sup>の歌<sup>うた</sup>に相<sup>あ</sup>違<sup>ちが</sup>ひあるまじと、  
 二<sup>ふた</sup>度<sup>たび</sup>と二<sup>ふた</sup>度<sup>たび</sup>が一度<sup>いちど</sup>となつてくると、もう床<sup>とこ</sup>についたまゝ  
 頭<sup>かぶ</sup>が上<sup>あ</sup>らな、二<sup>ふた</sup>度<sup>たび</sup>が一度<sup>いちど</sup>となつてくると、もう床<sup>とこ</sup>についたまゝ  
 が、更<sup>さら</sup>にその功<sup>こう</sup>能<sup>のう</sup>が、大<sup>おほ</sup>きく、加<sup>か</sup>治<sup>ち</sup>祈<sup>いの</sup>禱<sup>たう</sup>とやつて見  
 れ、昨日<sup>きのう</sup>の名<sup>な</sup>花<sup>はな</sup>は、雨<sup>あめ</sup>、風<sup>かぜ</sup>にうらみ、日<sup>ひ</sup>一日<sup>いちにち</sup>と衰<sup>おとろ</sup>弱<sup>じやく</sup>するばかりで、哀<sup>あは</sup>れ  
 く、今日<sup>けふ</sup>にも散<sup>ち</sup>りさうな有<sup>あ</sup>様<sup>さま</sup>では、御<sup>ご</sup>兩<sup>らう</sup>親<sup>しん</sup>の心<sup>こころ</sup>配<sup>あは</sup>れ、三<sup>さん</sup>人<sup>にん</sup>の兄<sup>あに</sup>の嘆<sup>なげ</sup>

添<sup>そ</sup>削<sup>け</sup>してやらふ、なんぢや  
 君<sup>きみ</sup>ならで、誰<sup>たれ</sup>にか見<sup>み</sup>せん、我が庭<sup>にわ</sup>の  
 梅<sup>うめ</sup>の花<sup>はな</sup>さく、二<sup>ふた</sup>ツ三<sup>さん</sup>ツ四<sup>よ</sup>ツ  
 とな、は、は、は、こりや妹<sup>いもうと</sup>戀<sup>こひ</sup>歌<sup>うた</sup>ぢやな、だから乃<sup>な</sup>公<sup>こう</sup>は和<sup>わ</sup>歌<sup>か</sup>は嫌<sup>きら</sup>ひ  
 ぢや、なんぞと云<sup>い</sup>ふと、君<sup>きみ</sup>ならで……誰<sup>たれ</sup>にだつて見<sup>み</sup>せたつて宜<sup>よろ</sup>ひ  
 いぢやないか、滅<sup>め</sup>るものぢやあるまいし、  
 の、三<sup>さん</sup>和<sup>わ</sup>歌<sup>か</sup>だつて詩<sup>し</sup>だつて、讀<sup>よ</sup>んだつて、もうすこし活<sup>かつ</sup>潑<sup>ぱく</sup>に願<sup>ねが</sup>ひ  
 たい、あ、あ、あ、梅<sup>うめ</sup>へ括<sup>くわく</sup>りつめておいたが宜<sup>よろ</sup>い、  
 雀<sup>つばき</sup>か糞<sup>くそ</sup>をかけてチユ一<sup>いち</sup>と笑<sup>わら</sup>ふ、あは、は、は、  
 露<sup>つゆ</sup>子の短<sup>たん</sup>冊<sup>さつ</sup>は件<sup>くだん</sup>の短<sup>たん</sup>冊<sup>さつ</sup>を  
 梅<sup>うめ</sup>の小<sup>せう</sup>枝<sup>えだ</sup>に結<sup>むす</sup>ひつけ、どうか戀<sup>こひ</sup>人<sup>にん</sup>の眼<sup>まなこ</sup>にふれませうと、心<sup>こころ</sup>に  
 祈<sup>いの</sup>念<sup>ねん</sup>じてわが部<sup>ぶ</sup>屋<sup>や</sup>へ戻<sup>もど</sup>つて始<sup>はじめ</sup>終<sup>しま</sup>庭<sup>にわ</sup>の梅<sup>うめ</sup>へ心<sup>こころ</sup>を配<sup>あは</sup>れつてたりました  
 誰<sup>たれ</sup>惡<sup>わる</sup>いどころは直<sup>ただ</sup>して頂<sup>たま</sup>きどう存<sup>ぞん</sup>じまする  
 三<sup>さん</sup>ツムよし〜



正公の御墓所、本妙寺の住職、日祐和尚、尤もその頃より本妙寺と申しまするの、大寺は、附屬寺院、細川公の御信厚く住職、日祐和尚、如き法華宗では有数の善智識でございまして、當代の日和安場家は、國一の法華宗、歸依者でございまして、當代の日和安場家は、如水魚の交りありますから、かねて往々に當りて、庭の模様なども御存知で、折悪しく主人が、出仕の留守中、奥方へ舞になり、すまじく、病室へ通し、病人の枕頭に、花の顔色あせて、見る影もな、容態を見、お和向は、病の枕頭に、花の顔色あせて、まし、ばら、容態を見、お和向は、病の枕頭に、花の顔色あせて、裏に、なり、ま、容態を見、お和向は、病の枕頭に、花の顔色あせて、知らば、お顔色に、現は、れ、し、か、し、御心配、御養生の仕方も、愚僧、か、く、と、早、く、

き、切つて、幼少の頃より育てあげたる乳母の、園は、書夜分たす、詰、切つて、幼少の頃より育てあげたる乳母の、園は、書夜分たす、に、趣、か、ない、い、お、ま、け、に、今、日、この、頃、は、醫、者、も、い、や、ど、う、し、て、も、快、方、い、一、日、も、早、く、死、に、た、い、と、駄、々、を、担、ね、て、手、も、つ、け、ら、れ、ぬ、も、う、こ、の、介、抱、も、醫、藥、も、詮、な、い、と、駄、々、を、担、ね、て、手、も、つ、け、ら、れ、ぬ、も、う、こ、覺、束、な、し、ど、幾、多、の、名、醫、が、ヒ、を、な、げ、た、然、ら、ば、この、病、氣、が、な、ん、ど、い、ふ、に、そ、れ、が、分、ら、ぬ、管、ち、や、分、ら、ば、この、病、氣、が、な、ん、様、も、あ、る、が、ご、う、も、分、ら、ぬ、管、ち、や、分、ら、ば、この、病、氣、が、な、ん、て、あ、る、譯、も、し、ま、し、て、配、劑、な、ご、に、あ、ら、ふ、理、屈、も、な、い、に、書、い、四、病、の、外、で、す、も、の、所、謂、こ、れ、が、俗、語、の、お、醫、者、さ、ま、で、も、有、馬、の、湯、で、殘、念、な、が、ら、可、愛、の、娘、さ、あ、こ、う、な、る、と、一、家、の、愁、嘆、は、一、通、り、で、は、散、さ、ね、ば、な、り、ま、せ、ん、見、舞、と、あ、つ、て、た、越、に、な、り、ま、し、た、が、加、藤、清、



成程と合点のまゝになりました乳母の園は、日祐和尚のお歸りに  
なるや、直に病室にとびこんで、露子さま、貴女はまだこの乳  
母を奉公人ぢやと思召しますか、た怨みに存じます」と心の  
ぢや可笑しい方が、能と目色を變へて怒つて見せて、園「ほん  
臭いなさい方、も、う、そ、ん、な、御量見なら、乳母は今日限り、  
お暇を頂いて、在所へ歸ります、永らく御厄介に」と怨みを言つ  
ねり泣いたりして見せすので、病人さんは寝てゐる空はござ  
いませぬ、園「まア待つて、乳母や、病人さんでそんな怒るか、  
氣にさせぬ事、ア待つて、乳母や、病人さんでそんな怒るか、  
日と迫る私の病氣、今其方に別れては、一時も活ては、あませぬ

第八席(三) (家の面目)

何を申すも今日御病氣と承はつたばかりで、兎に角御心勞にな  
つたは是非なしと、御心配は御無用、ついでには奥方には暫く御  
申さう、なアに御心配は御無用、ついでには奥方には暫く御  
違慮下さらぬか、またこの病室で申すも異なる事ござれば、座  
をかへて乳母御案内申さう、意味あり氣な和尚の言葉  
に乳母のお園は別間に御案内申さう、意味あり氣な和尚の言葉  
ど打ち笑み、且、さて乳母御露子どのはお幾才ぢや、病氣の次第  
才におなりなされました、且、は、左様か、時に御病氣の次第  
は醫者ぢや、全癒ぬ湯治でも駄目ぢや、心中に思ひあり、それが  
思ふに任せぬからぢや、よく前さんから尋ね申すがよい、  
つまり望みさへ叶へば、忽ち平癒、なア分りましたか、乳母の  
た園は今和尙の言葉をきくなり、成程それかと、心に合点がま  
かりました。



れます、そのお心が水臭いと申すもの、望みが叶はぬと仰在つ  
 ても、それは貴女お一人の御意見でございませう、それとも又た  
 誰にか御相談の上叶はぬとお極め遊ばしましたか、馬ぢやとい  
 ふてこの望みが、馬、それはまたしても左様な事、命に代へても申  
 したり申すのに、馬、それは真かや、馬、なんで詐りを申しませう  
 が、笑ふでないぞや、馬、なかく、笑ひどころぢやございませ  
 ン、乳母は一生懸命でございませう、馬、私の望みは……馬、  
 お望みは、馬、あ、明してございませう、馬、またしてもそんな事  
 ばつかり、なアお嬢様、貴女さまのお望みは、友様でございま  
 せうが、友様とやら、調子で、蒼褪た顔もほんのり櫻色、耻か  
 にも知らないわ、てな調子で、蒼褪た顔もほんのり櫻色、耻か  
 し、氣に蒲團を引つ、殿様にも奥様にも、こりや御異存はござ  
 外ならぬ友様の御事、殿様にも奥様にも、こりや御異存はござ

ぞや、馬、アそれ程の思召しなら、なせ乳母へお隠しなされ  
 ます、お怨みに存じます御幼少のどきから今日まで、お育て申  
 した乳母、お事なれば、他人が、命に代へてもお望みがあらふとも、  
 お隠さまの事、他に、人が、命に代へてもお望みがあらふとも、  
 せい、でか、それ、他人が、命に代へてもお望みがあらふとも、  
 いち、や、ご、い、ま、か、人、が、命、に、代、へ、て、も、お、望、み、が、あ、ら、ふ、と、も、  
 ます、れ、ご、私、の、口、から、申、し、兼、ね、ま、し、た、も、差、控、へ、て、居、り、ま、し、た、が、  
 ち、や、と、御、相、談、が、あ、る、だ、ら、ふ、と、今、日、ま、で、差、控、へ、て、居、り、ま、し、た、が、  
 今、に、た、明、し、く、だ、さ、ら、す、醫、者、も、イ、ヤ、薬、も、イ、ヤ、死、ぬ、ば、か、り、の、  
 お、言、葉、は、立、て、乳、母、は、た、た、存、じ、ま、す、と、涙、な、が、ら、怨、み、の、八、百、  
 を、並、へ、て、立、て、乳、母、は、た、た、存、じ、ま、す、と、涙、な、が、ら、怨、み、の、八、百、  
 懐、兒、一、圖、に、乳、母、が、怒、つ、て、あ、る、も、の、思、ひ、込、み、が、世、間、知、ら、ず、の、  
 け、れ、ど、私、の、望、み、は、叶、わ、ぬ、と、生、な、か、い、ふ、て、耻、さ、ら、す、よ、り、私、  
 は、こ、の、ま、死、ぬ、の、が、本、望、馬、それ、御、覽、じ、ませ、  
 まだ、隠、し、な、さ











對りた秘一ち淵物虚の現方にく  
 しましをををのの心用はは自なる  
 もして理自聞「の影平意れは永尊も  
 恐ご解然きこ如くを氣はるの年あ  
 れざ出悟十これ静寫さう明日月、  
 はい來り悟をがかな凡は、器は、  
 あるまたし程の明あある、ぬから  
 まい、高御教授の友千代、殊に武  
 理出の次第、友千代確かに會得  
 解の來たか、友千代確かに會得  
 印はか、友千代確かに會得  
 友「ハッ」先生御免と側  
 先生御免と側

言もおごも生あ面に負且如で友  
 ぢない招ざ寝御ら目なけるつあ千  
 やいきいから一ふなつはきはれ代  
 喃、にますれ門、なからたはは、に  
 、古相す、ののそら先ごは、なと  
 腹人なりそ、責れをう生は相八も  
 一杯の言れ種々あるひかつは、いこ  
 に張腹其たどるこれ申一に、幾、  
 り一杯にり心と流石へば、餘門弟、  
 過張り、言、い、た、先、目、も、  
 ぎ張り、言、い、た、先、目、も、  
 ては、言、い、た、先、目、も、  
 武を稽古するも能はずとある、外  
 錬古するも能はずとある、外  
 るも能はずとある、外  
 とも能はずとある、外  
 書を讀むにも、外  
 懶金



のげ 臣と  
上、下  
刻、一  
現、同  
今、正  
の、七  
午、御  
前、酒  
十、下  
時、さ  
……、れ  
……、て  
……、暫  
……、時  
……、の  
……、休  
……、息  
……、家  
……、例  
……、の  
……、武  
……、藝  
……、大  
……、試  
……、合  
……、奉  
……、行  
……、の  
……、お  
……、機  
……、敷  
……、上

第九席 (二) (東西の大關同士)

た稀代の業物、黄金作り、の立派なものを、流義にさして福草履  
 軽く乗せて、歩み出したる、その美くしさ、露子さんが生命と思  
 ひこんだも、無理はない、男でも惚々する風采の立派さ、それに  
 骨柄、選しく、勇氣が五体に溢れてゐる、あれの女共が騒ぐは、  
 業平様、なんとも、あ御立派なこと、町家の女共が騒ぐは、  
 また往來の人は、鼻を高くせねばならぬ事に、なるのでございま  
 の身になる、と、鼻を高くせねばならぬ事に、なるのでございま  
 せう……。

にあり合ふ、茶盤引き寄せ、友お許し下されませうか、高許す、  
 割つてお見やれ、友心得ました、茶盤を前に居合腰、握り固め  
 た拳の一撃、ヤッとかけた、氣を忘る、な、我も及ばず、手練の働  
 來した、天晴れ、その氣を忘る、な、我も及ばず、手練の働  
 見事、見事、恐ろしい力もあればあるもの、一撃の下に、茶盤を  
 真二ツに叩き割る、なんか、鐵拳とは、實に、友千代ほどの豪傑の拳  
 をいふのでございませう、これならば、高慢の天狗鼻、日頃天下に  
 槍術の名人は、乃公より外に、いと、高慢の天狗鼻、日頃天下に  
 し折つて石黒奴に、うんと、赤恥か、く、高慢の天狗鼻、日頃天下に  
 は、神ならぬ身のし、うんと、赤恥か、く、高慢の天狗鼻、日頃天下に  
 り、ました、さ、夜が明け、た、安場、當日は、正七ツの登城、どは、  
 申渡した、さ、夜が明け、た、安場、當日は、正七ツの登城、どは、  
 申渡した、さ、夜が明け、た、安場、當日は、正七ツの登城、どは、  
 上、下、の、禮、服、の、試、合、の、花、形、の、友、千、代、を、お、連、れ、に、入、り、門、當、時、お、預、け、申、し



講て眼身平まます巻れ中な圖つた  
 の敵に構素づす、も百つの知  
 當の構へは殿、こ黒安もた太せ  
 日隙へす兄様赤れ木場、る鼓に  
 だをてる弟の井は綿の若東が及  
 か窺相との棧は安の門輩西矢ぶ  
 らふ手掛様敷槍場紋下な倉、  
 何有のれにに、の服にれ入よや  
 れ様虚の親向木門に於ど口りが  
 も、を太密つ崎弟白ひもより鳴て  
 遠見睨鼓でてはと小て相りり試  
 慮てんで、禮刀目の高の幕る開  
 はあでド、御し、で袴弟達を、始  
 して動か前左双見、同人比紋そ  
 ない血かなる合に共の木、士、  
 、き、る合に共の木、士、  
 木肉赤をのサにつ綿赤、現はそ相  
 崎躍井合晴ッ腕くの井赤は始成  
 、るは團勝どにや袴は井れま  
 木、得に負開、へに足軍木するま  
 崎この意木、いへの捕はな崎るぞ  
 どうの崎双ての捕はな崎るぞ  
 聲なる槍は方互あひ足れ紅と  
 援るを木油いあるで袋は両白  
 のと素刀断にものごを白人、軍  
 聲無扱をなく目、のざ用、の、  
 が禮い育く禮、い、る、何、の、

すら下る代席の敷習板の例そ矢  
 ぐし、ににでに頭葺御年れ倉  
 に幕輕こてはこは齋軒棧の刻の  
 御外輩の五肥の審藤先敷通限上  
 着にと外高後棧判權きはりとに  
 席はい周石字敷奉之は大天い、  
 相御ふ園松土、行進九守守ふド  
 濟火順の井郡左安、曜細閣の  
 に消序棧伊宇右場御御川の  
 な組で敷勢土の一小紋越真一  
 つ、九に守に棧郎姓の中下同  
 た足曜は様三敷高、幔守に試  
 は輕に二、萬は保、幕様當合  
 、組櫻、百そ石、御、側を御るの  
 御、の石の、家祐御紋出大場、  
 案御御以他細老筆用、り座庭所  
 内使定上御川、は人上、前へ、  
 方番紋の一玄御一、げ背、押ド  
 よ綺打藩家蕃重々、た、後東し、  
 り羅つ士の頭役勝刀殿は西よ  
 そ星た、方様、の負持、様金にせ、  
 れのる一々、面付、の屏入るド  
 く如幔段御肥々、け一左風口、  
 く幕下着後、を段右をを尤と  
 奉に居引そに代親たつはてけ場り  
 席並きれ相郡威めた御列正所渡  
 へひ廻以成八のる棧近ね面はる











異存はない、其處で三名のお方から大守の御裁決を仰ぐことに  
 して御前へ伺候する、先づ總奉行の長岡監物殿よりお手許まで差  
 出さる、長さ今石黒、飯田、二尺五寸木大刀と記し  
 ございまして、番組に石黒、今日に至り矢と變更を願ひ出でました  
 るため、飯田は鐵扇をもつて相手にございませぬ、筒様に願ひ出で  
 ました、私共にはなんの異存もございませぬ、次第にござ  
 御裁決によつて勝負はたさ度、この段に伺ひ奉る次第にござ  
 いませぬ、太守越中守様にはございますので、御氣質に亘らせられま  
 た胃險な事が好みにございますので、弓矢に對する鐵扇とは  
 近頃の見物や許せ、苦しいので、御氣質に對する鐵扇とは  
 へた許しの次第を申しせ、尤も矢は審判奉行、監軍、試合奉  
 行、お三方立合の上お調に相成り、五本までといふた許にござ  
 いたしました、さして合の上お調に相成り、五本までといふた許にござ

ので白を用いたが、同じ足袋でも石黒の木綿に對して白綿の足  
 袋、底は刺織になつてゐるが絹だから如何にも自由が利く、心  
 掛の飾なしは些細な事で分りませぬ、如何にも刺織の友千代は木綿服  
 重でも飾るといふだけ、羽二重にもなる、刺織の友千代は木綿服  
 でも、下に軽く、新の稽古禰、羽二重にもなる、刺織の友千代は木綿服  
 か、五体が無論、千代にも起さる、武器は、何にかと申しませぬ  
 と、石黒は無論、千代にも起さる、武器は、何にかと申しませぬ  
 意地悪、弓、此方、柄物は、無用、か、ねて、手馴ました、所が、石黒は  
 相手が、弓、此方、柄物は、無用、か、ねて、手馴ました、所が、石黒は  
 相手、先づ、試合、奉行、こ、う、角、も、兩、軍、御、相、談、の、清、水、大、三、郎、殿、の、御、意  
 ら、ふ、と、先、づ、試、合、奉、行、に、は、審、判、奉、行、に、御、相、談、の、清、水、大、三、郎、殿、の、御、意  
 先、生、に、は、異、存、が、な、い、と、免、角、も、兩、軍、御、相、談、の、清、水、大、三、郎、殿、の、御、意  
 見、は、ご、う、で、あ、ら、ふ、と、奉、行、同、士、か、ら、御、相、談、の、清、水、大、三、郎、殿、の、御、意































予が媒灼が氣に召さぬか、不承知か」

第十席(三) (深夜の松並木)

殿のお成といひ、友千代御所望といひ、御媒灼といひ、安場家にとりては、この以上面目はない筈、然るに高保先生には殿のお言葉に對して申されまするには、高御上意有り難き仕合せにございませぬ、友千代は門弟とは申せ、只今も本人よりもお答へ申しあげましたる通り、母は申せ、健全にございませぬ、母なる人にも御上意の次第を申し傳へましたる、殊に本人同士の間にも篤と調へませねば、私の心のみにてはこの儀ばかりは、其方には異議はなからふな、高何にして異議を申しませぬ、有難う存じまする、高さて露にも異議なしとすれば、友千代

ぢや喃、母へ相談もあらふが其方だけの意見を聞してはくれまいか、士は己れを知る者のために死す、これ程までに御所望を養育の大恩ある師の娘を、こゝで嫌だとは申されませう、彼は心の中は四苦八苦の苦痛を色にも出さず、友有難き君の御上意かつは親にもまさる師の御厚意、なにしに違背は申しませうや、御上意に従ひまして、御高恩の萬分の一を酬い奉る外に存念はございませぬ、今日より承引の致しくれた、予も満足ぢや、それと母との談合は今日より四日の間ぢや、忘れまいな、友なりにして忘却いたしませうや、高これよし、それよし、目出度、祝言の儀は追ての沙汰、吉日を選んで盃の致させ遣はさう、何れも大儀であつた、大名といふものは否氣なもので、御自身の舞が濟んだから、皆の者大儀であつた、御見送として、飯田友千



並木なみきの影かげから見てゐると、どうやら提燈ていとうの紋もん所ところが安場やすばの定さだ
 心こころちやが、灯あかりをお貸か下くださらぬか、グープ……ちと酷こつ酩めいのいたし
 て履はき物を紛まじ失しの致いたした、奴やつで急いそぎでもあらふが、灯あかりを一ひと寸すんた貸か
 ださ「れい」石いし黒くろも脱だつらぬ奴やつで急いそぎから酔よた振りして其その處ところらどウロ
 く「やつてゐる」仲なつ下くだ駄だの御ご紛まじ失しと「な、それは、御ご迷まよ惑わく、イ
 ヤこれでごさいます、面めん目め次第しだいもござらぬ、先生せんせいへは内うち密みつに、や貴あなた公こうは
 安場やすば家の御ご仲なつ間ま、面めん目め次第しだいもござらぬ、先生せんせいへは内うち密みつに、や貴あなた公こうは
 今頃いまごろも真ま個この事ことは申しませぬが、先生せんせいを狙ねらふ石いし黒くろと申しつたなら、
 なに、真ま個この事ことは申しませぬが、先生せんせいを狙ねらふ石いし黒くろと申しつたなら、
 たい自分おれを安場やすばの仲なつ間まと知しりませぬが、先生せんせいへ内うち密みつに、や貴あなた公こうは
 ひだから、且かつ那なのお知しりませぬが、先生せんせいへ内うち密みつに、や貴あなた公こうは
 す、殿との様さまの、お成なりり、でござつたが、目め出で度たと、ちや、ア左ひだり様さまか、今いま
 日ひお殿との様さまの、お成なりり、でござつたが、目め出で度たと、ちや、ア左ひだり様さまか、今いま

代よ、この外ほか高たか弟ていの面めん々々、大おほ手て御ご門もんまでお見み送おくり申まをしあけて、別わか
 れ、親おや族しやく知ち己おのれを招まねいてお成なりの祝いわい賀がの酒しゆ宴えんを開ひらいて、安場やすば家けは
 り、親おや族しやく知ち己おのれを招まねいてお成なりの祝いわい賀がの酒しゆ宴えんを開ひらいて、安場やすば家けは
 負おしけ、客きやく來きたばかりで、大おほ層そうな繁はげ昌さむらでござい、後のち領りやう分ぶんが、試し合あは
 ば、扶たす持もちには、近ちか頃ころ無な卦くわいには、三十さんじゅう日にち間かんで、肥ひ後のち領りやう分ぶんが、試し合あは
 も、安場やすば高たか保たかの、思おもへば、憎にくみ、皆みな飯いひ田た友とも千ち代よの地ちを
 あり、安場やすば高たか保たかの、思おもへば、憎にくみ、皆みな飯いひ田た友とも千ち代よの地ちを
 たい、拂はらはれる、位ゐな、毒どくを食くへば、彼かれ等ら二ふた人にんを、な、き、もの、に、し
 て、怨うらみ、晴はる、た、ち、退ひか、さ、う、だ、く、こ、悪わるい、奴やつも、あ、れ、ば
 ある、の、成なりり、日ひから、高たか保たかの、先ま生せいをつ、け、狙ねらふ、て、お、た、處ところが、幸さいひ、
 入いる、殿との様さまの、成なりり、日ひから、高たか保たかの、先ま生せいをつ、け、狙ねらふ、て、お、た、處ところが、幸さいひ、
 へ、急いそいで、來きたる、一ひと人にんの、仲なつ間まの、計はかつ、て、登のぼる、と、大おほ手て筋すぢから、櫻さくらの、馬うま場ば



ごど尾待て徒自  
 さい申はち安に己  
 います上げ上う場に出が  
 す、げ々くけ先來た不  
 下、吉ま先生た始  
 城、御酒したを石未  
 になど、この刀、黒は  
 うつたの御事、下に術、左の隅  
 つたは彼馳走を御存知、ない安場先生、御殿の首  
 怪れこれ夜も更けました四ッ過ぎに  
 しい空ちや、降らねばい、がど

第十(一)席 (悪事の相談)

まて折  
 も高保からの暗を勿怪の幸ひに、松の並木の馬場先きに、身を隠し  
 申しませうか、何れにして、高保先生のお命はこれ風前の燈  
 櫻の馬場の大活劇は一寸一息入れまして。

中門ならは七様でして御はどのでつ登  
 に、今お話十五か、外、て存城のの御て城、  
 首に見か下日、拙には家知下には登、  
 洞てかにおさ長者、御せから郷、友  
 と、たれ、出、な生、と、御、う、東、里、へ、千、代、  
 一、この、で、よ、ち、友、親、も、あ、南、へ、そ、れ、は、初、耳、へ、お、お、  
 ツ、の、な、は、は、千、戚、ご、の、飯、り、ま、は、郷、里、へ、お、お、  
 に、馬、れ、さ、れ、明、日、あ、ら、た、め、て、お、禮、に、ま、る、石、黒、伴、左、衛、  
 して、の、場、ま、せ、仲、間、を、出、し、ぬ、いた、石、黒、伴、左、衛、  
 、この、夜、の、雨、の、引、導、渡、し、て、く、れ、る、ン、の、  
 世、の、雨、の、引、導、渡、し、て、く、れ、る、ン、の、  
 仲、間、を、出、し、ぬ、いた、石、黒、伴、左、衛、  
 必、ず、も、に、先、生、へ、  
 御、存、知、下、から、東、南、へ、當、り、ま、し、て、道、な、ら、四、里、た、ら、ず、益、城、の、飯、田、村、  
 御、家、族、で、も、あ、の、飯、田、山、の、麓、で、ご、ざ、い、ま、す、さ、う、な、石、左、様、か  
 御、親、戚、ご、と、も、な、い、御、様、子、と、承、は、つ、て、お、り、ま、す、石、左、様、か  
 御、様、お、一、人、で、ご、ざ、い、ま、す、さ、う、な、石、左、様、か  
 御、様、お、一、人、で、ご、ざ、い、ま、す、さ、う、な、石、左、様、か  
 御、様、お、一、人、で、ご、ざ、い、ま、す、さ、う、な、石、左、様、か











の美人で年は十七、今度殿の媒妁で飯田友千代と結婚するといふ話、こゝで衣服の注文から安場へ出入し、時機を見て露子の頭からなる怨みを返すことになる、お金になるワで、兩人相談を誘拐してやらふといふ相談、さすれば安場へも飯田へも、日が出來上つて了つた、石どうだ留吉、これが出來た曉は、まづ捨て賣りにしても千兩、灘の親分と山分にした所で五百兩はこつちの物だらふ、安場の娘なら近代の堀出した物だ、此奴アどつちの芽が吹きかけた、宜しいやりませう、石鬼も角も最初番頭をやつて、注文を受け、貴様が行くのはその後、安場家のだ、ようが合点と兩人が、示めし合せた悪事の秘密、安場家の一つ、騷動、露子の難儀といふお話。

第十一 席 (二) (勇士の決心)

お話分岐しました此方は飯田友千代でござい、細川公よりの御所望といひ、安場先生の令嬢露子と縁談といひ、今、自分の枯れても飯田覺兵衛とて、加藤家の柱石とまで、唄はれし名門の嫡子に生れたる身が、家没落後の今日、百石の知行も容易ぢやないか、七百石は過分とも、太平無事の今日、百石の知行も容易ぢやない七、石は過分とも、名譽も有難しと思はぬでも、祖先へ對してんが、徳川の配下、自分も倍々、臣として母の言葉に従はせし、申譯なし、かつや、自分も倍々、臣として母の言葉に従はせし、は、加藤家の御先途を見届けたため、なかつた、一通り武藝修業の曉も、加藤家を回復し、七人扶持でも戴くが望みである、殊に、細川の策路である、よし、露子の縁談もつまりは自分の足を括る



も御久餘へ下出つ阿旅母ん不れ  
 存留儀御までて蘇のとの義ま  
 娘知米な回で下大山身と和で不  
 露ないへ、答五の津越と尙、孝た  
 子いとなの里關へ出と成別度は  
 安發つ一の道出で思りれ今知、  
 の場足た書を、で、ひ、を日り友  
 婚家い身を、こ陸そまたつがな千  
 禮でたの上め、路れしたはま川公、  
 をはしを、で大阪ら久留米、  
 願ひ友した、に生へし、博多、  
 出千代、こなを別お仕立の書日、  
 夫歸宅次第してそ奉公の上で緩々  
 婦宅次第してそ奉公の上で緩々  
 角もにの公城へとづて

下し交少益た人分細最分は五知  
 し、への城ち非の川初のせ才る  
 お加て頃、の去人望公に望ぬの人  
 か藤問よ郡るのみの母み、春の  
 れ家談り、が惡に御のをしよ爲  
 たの合師飯上、口は厚言達か  
 し御、と田分世替意葉すし今死  
 と先事頼の別のらをにる、日す  
 、途のみ里、惡れ今從事今まの  
 涙を成しに御評ぬ無ひが細で本  
 な見行常た恩も、に、出川御文  
 が届か樂ちを大四す坊來家丹、  
 らたら寺歸返義日る主ない仕下厚  
 のし、のりすに間、の忍な、へさ意  
 願就自船、時、はかたばつこの露れ  
 ひて分山久、機、もへ暇なての子し死  
 には今希尙振、あらをい、る望ののど  
 、よ望にりらぬけ苦、がと御も  
 母、も三諸面母、、た痛、さ叶、縁、思、忘、  
 快、ケ國會、にさ、こ、は、は、れ、は、の、は、れ、  
 く、年、修、し、對、う、の、勿、苦、ば、ぬ、結、な、ぬ、  
 承、間、業、、面、だ、ま、怪、痛、師、位、ひ、て、さ、ま、つ、  
 知、の、と、三、、、の、だ、の、ひ、は、ら、忘、た、  
 し、た、身、人、じ、ま、肥、幸、が、御、な、は、ら、忘、た、  
 て、暇、を、膝、た、と、後、ひ、恩、ら、は、ら、忘、た、  
 く、を、瘡、を、幼、を、自、自、自、自、







あれツと叫ぶ間もくれず、頭上から真綿入りの大風呂敷をうち  
 被せ口に當る所を丸括の帯見たやうな奴で猿轡、手も足も引つ  
 括つて擔ぎあげ、裏木戸から誘拐した者でござい、た、誘拐さ  
 は神ならぬ安場家ではた氣のつきさうな事がない、た、誘拐さ  
 れた者にせよ、他に何に一つ盗まれた譯でもない、た、誘拐さ  
 なは、露子の道具、殊に手で目欲いものが一つもない、た、誘  
 不斷着の衣裳は、脱いで枕元に疊んであるに拘はらず、外出の  
 時に着る衣裳や帯のやうなもの、泥棒など誘招されたとすれば、そ  
 て出たときか思はねばならぬ、泥棒などに誘招されたとすれば、そ  
 れまで聲をたてねばならぬ、聲もたてぬ藻掻きもせぬとすれば  
 藻掻く音でもせねばならぬ、聲もたてぬ藻掻きもせぬとすれば  
 自身に得心して出たものといはねばならぬ、藻掻きもせぬとすれば  
 内門弟は、いふも思か、三人の兄弟、仲間若黨に致るまで、四方

木劍がよからふといふを制して、「いや、さうでない、父上  
 の外出を差止めになつたも理由がありさうだ、真劍く」成  
 程それもさうだと三人が、各自に灯を照し、部屋くを見廻つ  
 て行くうちに、妹の露子があな、床はそのまゝになつてゐる  
 が、そこらに馬鹿にとり散してある、これを眺めた三郎は、仰  
 天ながら「三兄上、大變が出来した、妹の姿が見へませぬ」  
 叫びたてました。

第十(三) (意外な濡衣)

露子の姿の見へぬも道理、既に申しあげましたる通り、悪黨春  
 日の留吉がかの石黒伴左衛門と共謀になつて忍びこみ、例の呉  
 服の注文取りにいりこんだ番頭喜助、此奴の案内で勝手は充分、  
 安場家の寢静まつた頭を窺がひ、た、嬢さんの寢間に忍びいり、



を 疊へなげつけ、御様子、取次、の門弟は驚きながら、見ても  
 うた、ちさつた跡である。〇「はやたち去りましてございませ  
 う、それは分りませぬが、兎も角も御用とあらばおひかけ見ませ  
 うか、高おつかげて見て貰ふ」心得ました、奥方は御心配、先生は非  
 素足のまゝ、何事でも飛び出しました、お尋ねあると、先生は無  
 らの紙、何事でも飛び出しました、お尋ねあると、先生は無  
 常の御激昂、何事でも飛び出しました、お尋ねあると、先生は無  
 件の手紙を再度お取りあげ、相成り、友千代は大殿の御厚意を無  
 にするの紙を再度お取りあげ、相成り、友千代は大殿の御厚意を無  
 を忘れるの紙を再度お取りあげ、相成り、友千代は大殿の御厚意を無  
 ある文、細川公へ仕官望みなり、今日まで、諸國修業の道に就く  
 子とれば、我が君へ仕へまつる事は、出藤の遺臣、飯田覺兵衛の遺

八方へかけさせて、露子の行衛をお捜しになり、空しく、夜があ  
 けても、なんの音もない、折角の追手も一通りでない、殊に乳母  
 といふ始末に、安場御夫婦の嘆きは、起して病氣になつて了つ  
 のお園はあまりのことに仰天し、癪を起して病氣になつて了つ  
 た、いふ騒ぎ、安場の家は、この一事で、高保生は、うなづ  
 の中にも、又火の消へたやうな様子、中にも、高保生は、うなづ  
 行衛がしれぬとあつては、第一殿様へ對しても、また約束した  
 友千代、今にも在り所から戻つてきたら、なんといひ譯しやうか  
 秘し、男でもあつて出奔したといはれても、仕方がない、殿様へ  
 申譯、この二つに差當つて當惑、に、友千代が大津の宿から、  
 御夫婦、膝をつき合せて、御相談最中に、先生には、何事かと、  
 差たてました、飛脚が致着いたし、先生には、何事かと、  
 づ御開封になつて、書状を御披見になると、見る、  
 に青筋がブルブルと二三本現はれてくるか、と見ると、  
 件、手紙







太 閣 秀 吉 は 常 に 「 難 は 多 かれ、 運 は 強 かれ 」 と 申 され ました さ  
う で ござ い ます、 成 程、 運 が 弱 く ち や 何 に も な り ませ ん が、 運  
が 強 く て も 難 は 少 ない 方 が よ う ござ い ます、 殊 に 飯 田 友 千 代 の  
如 き、 不 慮 の 災 難 に 出 喰 せ ま し て は、 そ れ ぞ お 氣 の 毒 な も 通  
は 過 ぎ、 な ん と も 申 し や う ござ い ませ ん、 殊 に 母 里 江 どの に  
於 き ま し て は、 一 子 友 千 代 の 十五 才 の 春 まで 懐 に入 れ たい 程 の  
可 愛 い の 時 分 に入 れ て 安 場 先 生 の 門 に入 れ 足 掛 け 八ヶ 年 の 心 づ  
人 の 願 ひ を 入 れ て 安 場 先 生 の 門 に入 れ 足 掛 け 八ヶ 年 の 心 づ  
僅 か 道 なら 四 里 半 ば かり 先 生 の 門 に入 れ 足 掛 け 八ヶ 年 の 心 づ  
や つ と 一 人 並 の 修 業 が 出 來 た 所 思 信 不 通 じ して 稽 古 を 胸 にな  
で 卸 す も 間 も なく、 ま た 三ヶ 年 の 旅 の 身 と、 可 愛 い の 子 門 出 を 送

第 十 二 席 (一) (健 氣 の 御 最 期)

の あり さう な 事 も なく、 奥 方 には た い 悲 嘆 の 涙 に 暮 れ て 居 ら っ  
し や る、 安 場 先 生 の 出 奔 の 御 登 城 と 相 成 り、 君 公 へ 御 面 謁 を 願  
ひ 出 せ、 友 千 代 の 兄 弟 へ 仰 せ 付 け 下 さ れ 申 上 げ、 討 手 と 願 願  
愚 息 二 郎 外 御 立 腹 弟 仰 せ 付 け 下 さ れ 申 上 げ、 討 手 と 願 願  
に も 殊 の 御 立 腹 弟 仰 せ 付 け 下 さ れ 申 上 げ、 討 手 と 願 願  
出 され、 高 保 先 生 は 参 せ ば、 謙 慎 を 自 身 に 願 願 願 願 願 願  
し た が、 高 保 先 生 は 参 せ ば、 謙 慎 を 自 身 に 願 願 願 願 願 願  
相 成 り、 高 保 先 生 は 参 せ ば、 謙 慎 を 自 身 に 願 願 願 願 願 願  
新 う な る と 災 難 な は 飯 田 友 千 代 は 漸 へ 久 留 米 の 城 下 に 到 着 いた  
る も の、 何 にも 難 は 飯 田 友 千 代 は 漸 へ 久 留 米 の 城 下 に 到 着 いた  
と 云 ぶ お 話、 一 寸 一 息 入 れ ませ して……。







し、この、男まさりの里江でも、何んと返答の仕様とてござい  
 ませんが、云は、伴が一期の浮沈、家名にかゝる事ですから、  
 左様か、濟されませぬ、屹度思案の臍を固めて、馬外ならぬ御  
 兄弟の言葉、決して疑ひ申す所もございませぬが、伴が  
 不行跡の御妹を誘拐したと仰在るは、そりや何時の事とござい  
 ますか、些と臍にたちかねます、出来事、なほそれによれば、  
 ら、菊地の言葉、一昨夜の出来事、父への詫言、馬あの大津  
 證據は、如何にも大津より飛脚をも御恩を思はす、情深きお殿  
 より、如何にも、馬成程、師の御恩を思はす、如何にも不義……  
 様の御厚意を餘所に、師の御恩を思はす、如何にも不義……  
 不義に相違ございませぬが、彼が身にしたりは、如何にも不義……  
 にも、加藤家の遺臣として、無理からぬ事なれども、それなら  
 ば、何故その時に辭退はしないか、無應の返辭は四日間、その間に  
 國を出奔、あまつさへ、師の娘を馬暫らくお待ち下されませ

り、まこと海岳の恩と思は、師の後足に蹴つたは、兎も角とし  
 て、師の娘まで誘拐は致されぬ筈ぢやが、御老母、口は調法なし  
 も、あのかざりな、里に、なんど御在りませぬ、師の娘を誘  
 招、あのかざりな、里に、なんど御在りませぬ、師の娘を誘  
 誰の事でもないとして、御身の御息友千代殿、馬に、あの、  
 奴が、切るまい、師の娘といへば、手前が、師の娘を誘  
 を、暗ます不義不孝、師の娘といへば、手前が、師の娘を誘  
 代、不肖ながら、手前兄弟の恩を忘れ、不義を働く、憎くして、  
 さ、御老母、あまのふ、包、身が、義を仰せ、蒙り、討手に、友千  
 行、御存知、あ、外、里江は、吃驚、仔細、可、悴、限、つて、そ、  
 隠、な、意、致、す、ま、じ、の、事、か、何、れ、に、し、て、も、災、難、の、ふ、り、か、  
 行跡、な、こ、は、致、す、ま、じ、の、事、か、何、れ、に、し、て、も、災、難、の、ふ、り、か、  
 動かぬ證據でもあつての事か、何れにしても、災難のふりか、



假令やうなき作が不所存何しに隠したて致しませうや、たゞ  
 加藤家の御先途見届けんためと申し出て誠に申しませうや、  
 何處の宿に不義の夢、人非人の作奴が何んで誠を申しませうや、  
 自害の行衛を知らぬ申譯け、且つは師の御恩を仇で報しませうや、  
 念の晴さをせませう流石は豪傑飯田覺兵衛の妻はござりて、御疑  
 の苦痛の色にませう流石は豪傑飯田覺兵衛の妻はござりて、御疑  
 老母の節儀、嘘、偽りのありさうな事もなく、深手にては所詮の  
 したぞ、疑念も晴れてござるぞ、さらばこの深手にては所詮の  
 事、失禮ながら御介錯は安場二郎、御免ッ」長き苦痛をみせる  
 も不憫と、二郎は後に廻つて首を落さんと振り上る表より、暫  
 時、お待ち下されませう、這入つてまゐりましたは、木影に忍ん  
 で承はり居りましたと、這入つてまゐりましたは、木影に忍ん

う、親子を加藤の遺臣と御存知の上ならば、改めてお詫の仕様  
 は、三上り、襖一重の隣室の佛間に入りお目にかけませう一禮し  
 て立ち上り、小箆の曳出しを曳き出す様子でござりましたが  
 佛臺へ一禮し向き直るとみへました時、黒お詫の仕様はこれに  
 佛免ッ」と言いきると、隠し持った懐刀、抜く手もみせ  
 す乳の下の着を通し、グツサとばかり突立てました。

第 十 二 席 (二) (名残は盡ぬ)

二 郎、三 郎 の 兄 弟 は 大 い に 驚 き、 左 右 よ り かけ よ つ て 抱 き 上 げ  
 家 名 の 受 け し 恥 辱 を 思 は れ ず に は、 何 故 友 千 代 の 行 衛 を お 明 し  
 下 さ れ ぬ な」と 疵 口 押 へ て 問 ひ かけ ます れ ば 黒 不 忠 不 義 不 孝